第5章 調査の結果

第1節 各トレンチの概要

1トレンチ・16トレンチ (第9~12図、図版2)

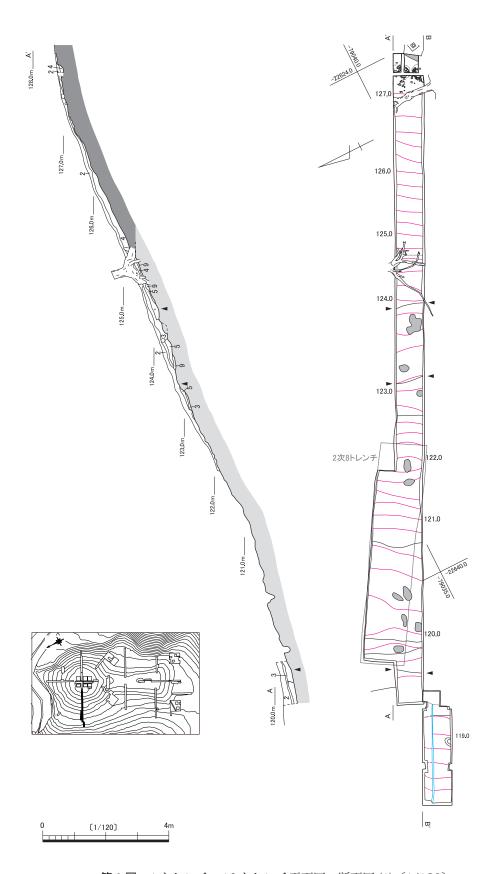
1トレンチは、想定主軸線に直交する後円部墳丘想定中心線上に位置しており、後円部西側墳丘頂部から墳裾まで設定した調査区である。後円部西側墳裾の位置、段築の有無、墳丘斜面形状などの墳丘構造及び後世の改変等の有無を明らかにすることを目的として設定し、平成18年度(第3次調査)に調査を実施した。16トレンチは、後円部墳裾西側の立面形態を確認し、盛土などの人為的な造成の有無を確認するため、平成21年度(第6次調査)に設定した調査区である。両トレンチは、調査年度は異なるが一連の調査であり、ここではあわせて報告する。

1トレンチは、当初 1m の幅で、墳頂部平坦面端部から墳裾推定位置付近まで 20m のトレンチを設定した。墳丘斜面下部で第 2 次調査時の調査区(8トレンチ)が重複していたため、墳丘面や堆積土の状況についてはその結果を参考に作業を行った。なお、墳裾位置を確定するため、西側にさらに長さ 80 cm、幅 60 cmの拡張区を設定した。調査面積は 21.1 ㎡である。16 トレンチは、1 トレンチの西側に幅 1m で平坦面の肩から西斜面の一部まで長さ 3.6m のトレンチを設定した。

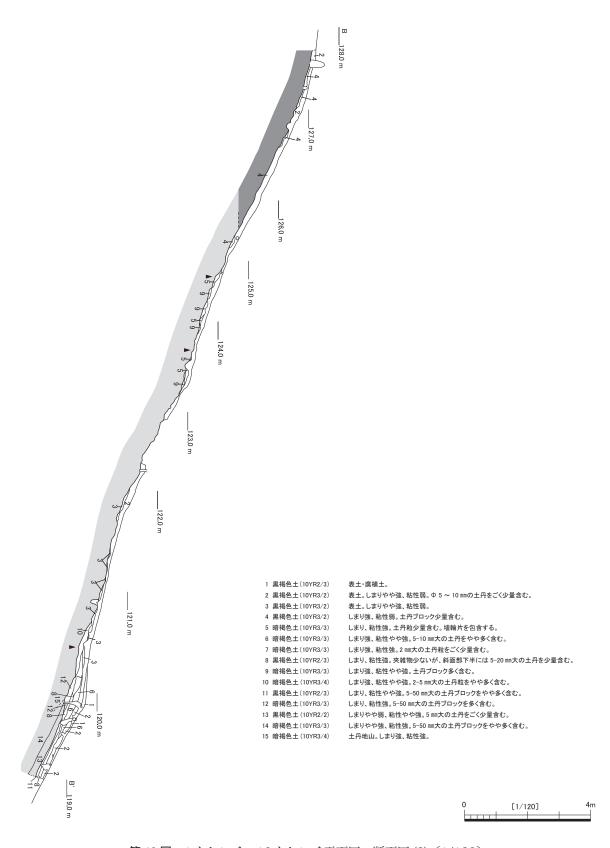
調査前の後円部西側斜面の現況は、墳裾推定位置から緩やかに抉られる形で立ち上がり、斜面の中ほどに傾斜がやや緩やかに変換する部分が観察できる状況であった。

表土層($1\sim3$ 層)を除去すると、墳丘斜面上半部で遺物を包含する黒褐色土~暗褐色土($4\sim8$ 層)の堆積が確認されたが、墳丘斜面下部では表土層直下で墳丘面が確認されている。中段テラス及び墳裾直上には初期流入土($9\sim12$ 層)の堆積が確認されており、さらに 16 トレンチ内の西側の斜面にかけては土丹ブロックが面的に広がる 11、12 層が黒色土層の地山直上に堆積している。 11、12 層は当初盛土の可能性が想定されたが、サブトレンチにより断割り調査を行ったところ、薄い堆積で斜面下部まで広がっているのみであり、人為的に積み上げた状況をなしていないことから、地山整形時の残土ないし初期流入土と判断した。

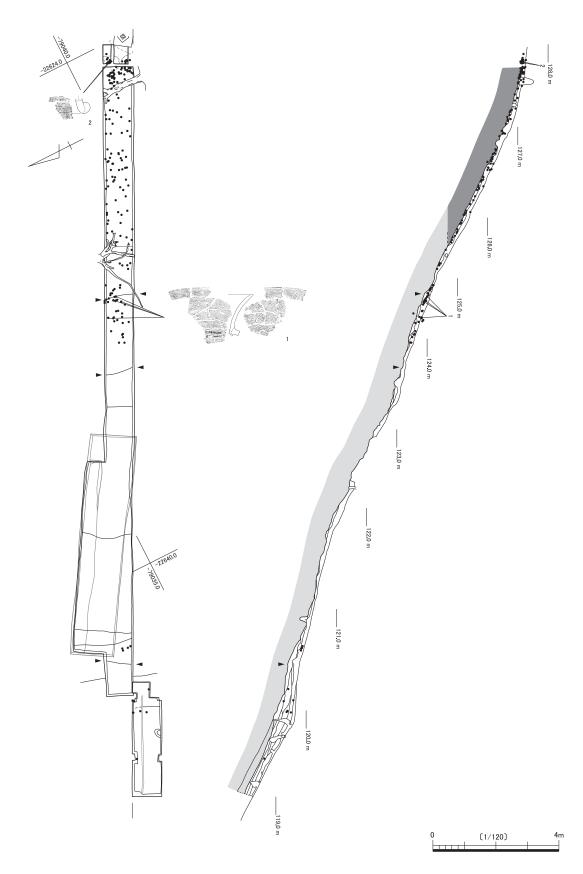
墳丘は、標高約 119.4m を墳裾とし、基盤層である逗子層(15 層)まで削り出して構築している。墳裾より西側は幅約 1 m の平坦面が巡り、さらに西側の自然地形の斜面へと至り、傾斜面には黒色土層の地山(13、14 層)が良好に堆積していた。墳丘下段斜面から中段テラスまでは約 22 度の傾斜をもって立ち上がるが、表土層直下で地山が緩やかに抉られるような形をなしている。1 トレンチ付近は墳丘への上り口となっていたため、堆積土層が流出している上、存在するはずの下段テラスも確認されないことから、築造当初の墳丘面は失われているものと判断した。中段テラスは標高 123.2 ~ 123.9m を測り、幅約 2.4m の緩傾斜面を形成している。上段は約 27 度の傾斜角で立ち上がり、墳頂部に至る。本トレンチでは墳丘の断ち割り調査を行っていないため、地山と墳丘盛土の境界は確認していないが、墳丘面の観察では標高 124.6 m付近と思われた。後述する 17 トレンチで実施した後円部墳頂部の断ち割り調査では、標高 125.7 m付近から上部は盛土であることから、もう少し高い位置に境界がある可能性がある。盛土層と考えられる墳丘表面は土丹ブロックを多く含む暗褐色土層で仕上げられている。



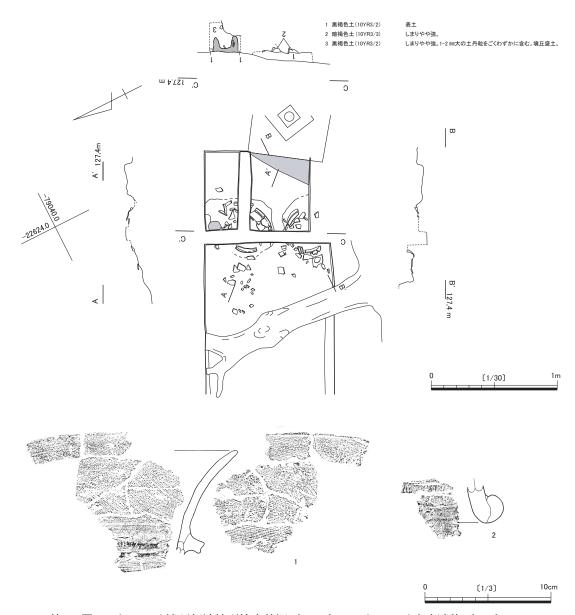
第9図 1トレンチ・16トレンチ平面図・断面図 (1) [1/120]



第 10 図 1 トレンチ・16 トレンチ平面図・断面図 (2) 〔1/120〕



第11図 1トレンチ・16トレンチ遺物出土状況〔1/120〕

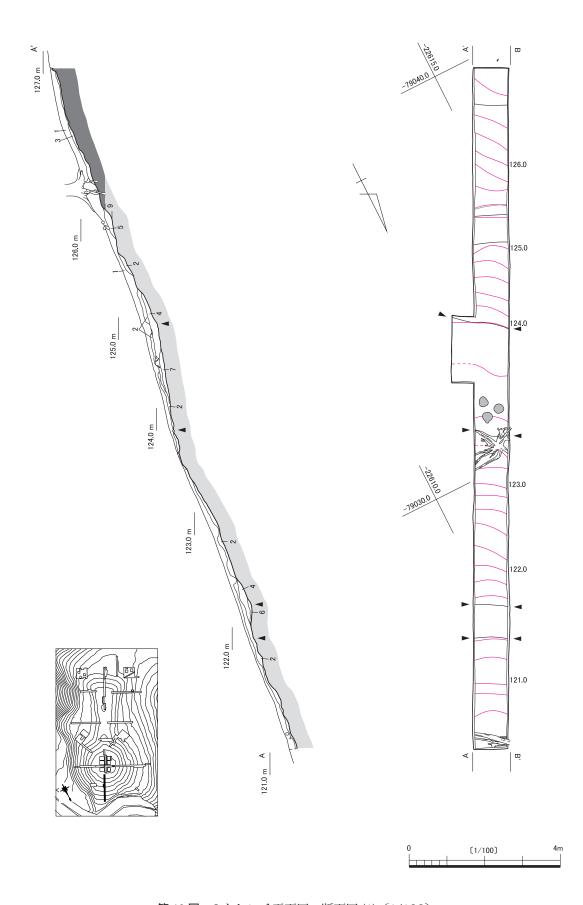


第12図 1トレンチ墳頂部埴輪列検出状況〔1/30〕・1トレンチ出土遺物〔1/3〕

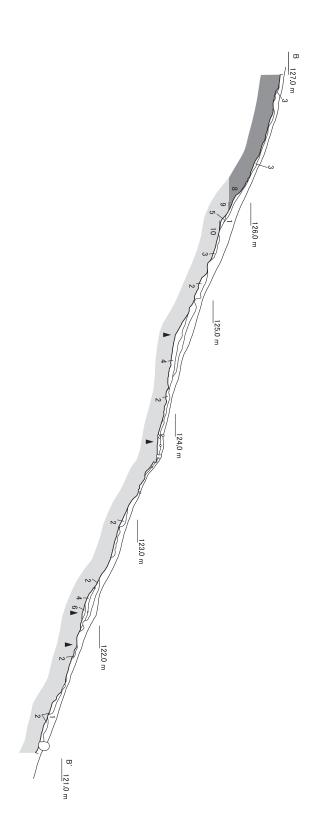
墳頂部平坦面の縁辺部に相当するトレンチ東端では、現地表下わずか6 cmほどで、埴輪列の一部と想定される円筒埴輪基部が2個体分発見された。上部はすでに失われており、墳頂部平坦面からやや斜面側に倒壊し流れ出したような状態で、約10 cm間隔をあけて並んでいた。埴輪列設置に伴う掘方等は明確でなく、基部が露出した状態で出土しており、あたかも墳頂部上に据え置かれただけのように思われた。ややしまりのある暗褐色土が埴輪基部の内部及び周囲に堆積しており、埋設土の可能性もあるがおそらく流入土と思われる。基部の径はそれぞれ40 cm程度に復元できる。形状は基部外面が折り返しにより肥厚しており、内傾して立ち上がる特徴的な円筒埴輪である。これら埴輪列を構成する遺物は保存すべき遺構と判断されたことから、これらを取り上げることはせず、必要な措置を講じて現状保存とした。

出土遺物(第12図、図版21)

遺物は中段テラスよりも下部の墳丘斜面からはまったく検出されておらず、わずかに墳裾付近で埴輪小片が出土しているのみであることから、築造当時の墳丘面が失われていることを端的に示している。中段テラ



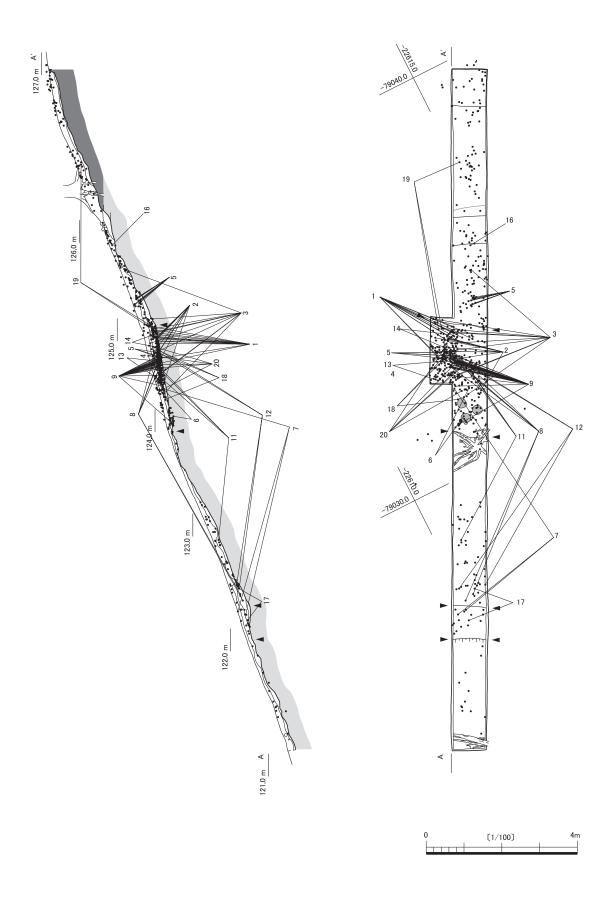
第13図 2トレンチ平面図・断面図(1) [1/100]



表土。 現表土。1 層よりも樹根が少なくしまりあり。 しまり非常に強、粘性弱。5-30 mm大の土丹ブロック少量含む。 しまり強、粘性強。1-3 mm大の土丹粒少量含む。 埴輪片やや多く出土。 しまり弱、粘性強。3-5 mm大の土丹粒少量含む。 しまり、粘性強。5-10 mm大の土丹粒多く含む。 土丹地山と黒褐色土の混合土。 埴輪片出土。 境丘盛土。しまり強、粘性や・強。10-100 mm大の土丹ブロック多く含む。 日表土。しまり、粘性強。



第14図 2トレンチ平面図・断面図(2) [1/100]



第15図 2トレンチ遺物出土状況 (1) [1/100]



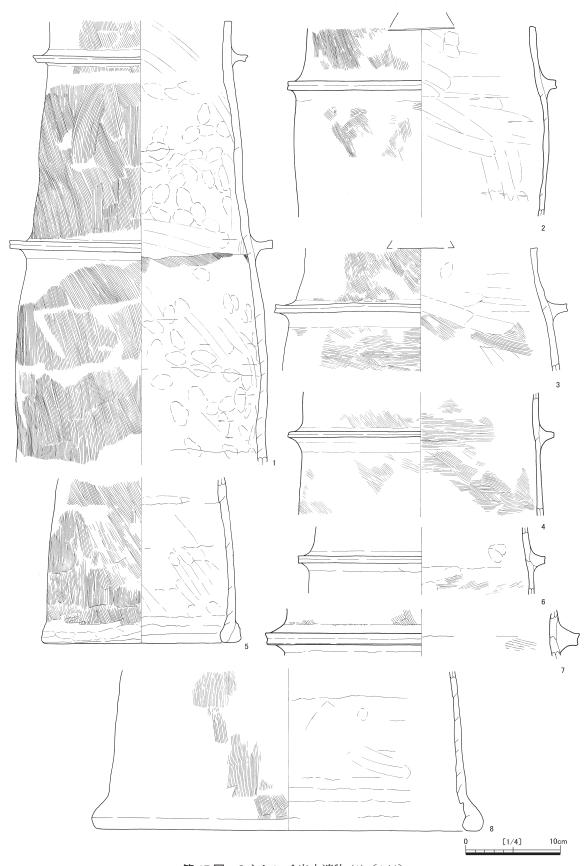
第16図 2トレンチ遺物出土状況(2)〔1/30〕

スより上部からは埴輪片が出土しているが、原位置をとどめるものはなく、墳頂部から流れ込んだものと思われる。遺物は 1 トレンチで 191 点、16 トレンチで 7 点取り上げたが、全体に小片が多く、図化したのは 2 点である。1 は円筒埴輪の口縁部片で、突帯まで残存する。2 は墳頂部埴輪列の一部で、原位置が動いていると判断したため取り上げた円筒埴輪基部の破片である。粘土帯を外面端部に貼り付けており、やや内傾しながら立ち上がる特異な形状をなす。

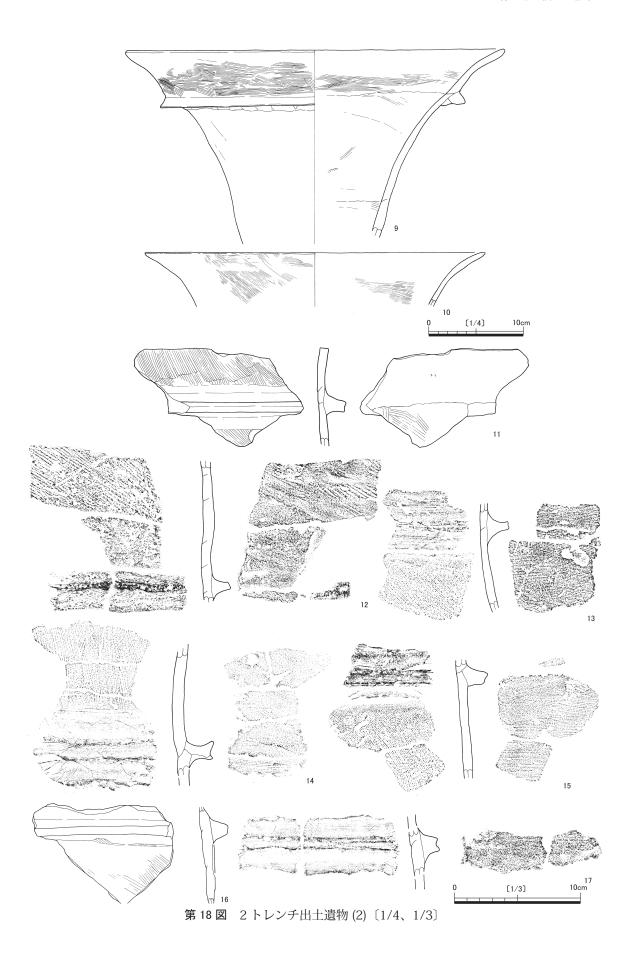
2 トレンチ (第 13 ~ 16 図、図版3)

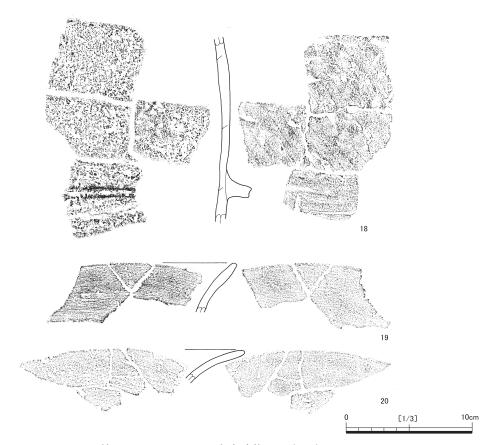
想定主軸線上の後円部北側墳丘に相当する調査区であり、段築の有無、墳丘斜面形状などの墳丘構造及び後世の改変等の有無を明らかにすることを目的として、平成18年度(第3次調査)に設定し、調査を実施した。墳頂部平坦面端部から墳裾側の緩傾斜部分まで幅1m、長さ18mのトレンチを設定し、調査を行った。第2次調査7トレンチの状況から本トレンチ設定箇所よりもさらに北側に墳裾が存在すると想定されたが、墳丘北側は昭和40年代に行われた宅地造成に伴う大規模な切土により、墳丘から10m程度の落差をもって落ち込んでいるため、安全性を考慮して墳裾の追求のためにトレンチを延長することを断念した。また、発見された中段テラス上から多量の埴輪が出土し、一部良好な状態で出土した壺形埴輪口縁部が北側土層断面にかかっていたため、幅60 cm、長さ1.8mの範囲で拡張した。調査面積は19.1 ㎡である。

調査前の後円部北側斜面は、後円部を同心円状に取り巻くように一定幅の緩傾斜帯が延びている状況が地 表面からも比較的明瞭に観察できる状況であった。



第17図 2トレンチ出土遺物(1)〔1/4〕





第19図 2トレンチ出土遺物(3)〔1/3〕

表土層(1、2層)を除去すると、下段、中段テラス付近及び上段斜面部で流入土($3\sim7$ 層)の堆積が確認された。土層の堆積は全体に薄いものの、確認されたテラス上を中心に比較的多くの埴輪片が出土していることもあり、築造時の姿が比較的良く残されていると判断された。

墳裾については、前述のとおり推定位置まで調査区を延長できなかったため本トレンチでは確認していない。墳丘は、下段斜面は約26度で立ち上がり、標高121.4~121.6mで、幅約0.8mの下段テラスをなしている。下段テラスは中段テラスに比べるとかなり幅狭ではあるが、逗子層(10層)を削り出しており、明瞭な平坦面をなしている。中段斜面は約30度で立ち上がり、標高123.6~124.0mで幅約2.9mを測る中段テラスへと至る。中段テラスの肩は樹木等の影響により一部流出しているが、流入土の堆積も比較的厚く、総じて遺存状態は良好である。さらに上段斜面は約25.5~27度で立ち上がり、標高126.4~126.6mで墳頂部平坦面へと至る。墳丘は、逗子層(10層)及び冨士黒色土層相当層(9層)を削り出した後、標高約126.4mから墳頂部までを盛土(8層)によって構築されている。盛土は断ち割り調査を行っていないが、1トレンチと同様にブロック状の土丹を多く含む暗褐色土層で表面が仕上げられている。

墳頂部平坦面の縁辺部では埴輪列の存在が予想されたが、本トレンチ内では確認されなかった。

出土遺物 (第 17 ~ 19 図、図版 21 · 22)

遺物は 667 点取り上げた。上段斜面から中段テラスにかけての流入土中からは埴輪片が比較的多く出土している。とくに中段テラス上からは多量の埴輪片がまとまって出土しているが、原位置をとどめるものはなく、いずれも墳頂部からの流れ込みと考えられる。 $1\sim8$ 、 $10\sim17$ は円筒埴輪である。1 は中段テラス上に流れ込んだ円筒埴輪で、は底部付近から第 3 段の途中まで約 1/2 遺存している。上に向かって窄ま

る形状をなしており、2条の突帯はいずれも高く突出している。透かし孔は確認されていない。2、3 は突帯に並行する透かし孔の一辺が確認されている。5、8 は円筒埴輪最下段である。いずれも基部外面が肥厚する第 1 号墳に特徴的な形態であるが、基部径 41 cmの 8 に対して、5 は 21.0 cmと小形である。9、10、18、19 は壺形埴輪の口縁部である。9 は中段テラス上に逆位で出土している。頸部からラッパ状に開く口縁部をもち、有段部は粘土帯を貼り付けた後、下から粘土を充填し指頭により押圧している。

3トレンチ (第20・21 図、図版4)

想定主軸線に直交する後円部墳丘想定中心線上に位置しており、後円部東側の墳丘に相当する調査区である。本トレンチは、後円部東側墳裾の位置、段築の有無、墳丘斜面形状などの墳丘構造及び後世の改変等の有無を明らかにすることを目的として平成18年度(第3次調査)に調査を行った。

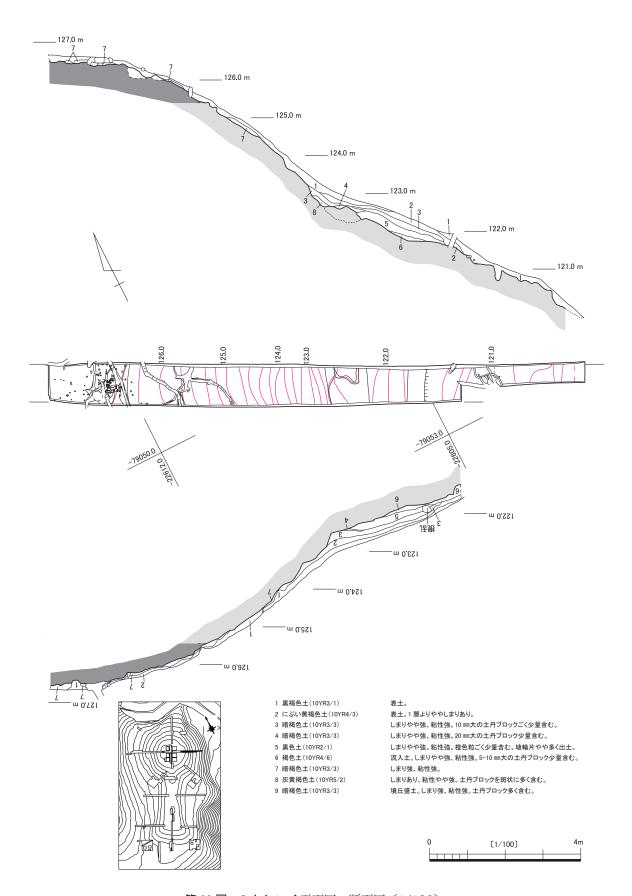
墳頂部平坦面端部から墳裾側の急斜面の傾斜変換付近まで幅 1m、長さ 11m の調査区を設定した。トレンチ設定箇所よりもさらに東側は、高低差が 8m ほどある急峻な崖面をなしているため、安全性を配慮し可能な範囲でさらに幅 60 cm、長さ 3m ほどトレンチを延長し、立面形態や崩落等の有無について確認した。調査面積は 12.5 ㎡である。

調査前の後円部東側斜面は、墳頂部から急峻な斜面部を経て、途中犬走り状の平坦面が巡っており、そこからさらに崖面に落ち込む状況が確認された。現況では後円部は、測量図からみても明らかに歪な形状をなしており、崩落等により本来の形状が失われている可能性が想定された。

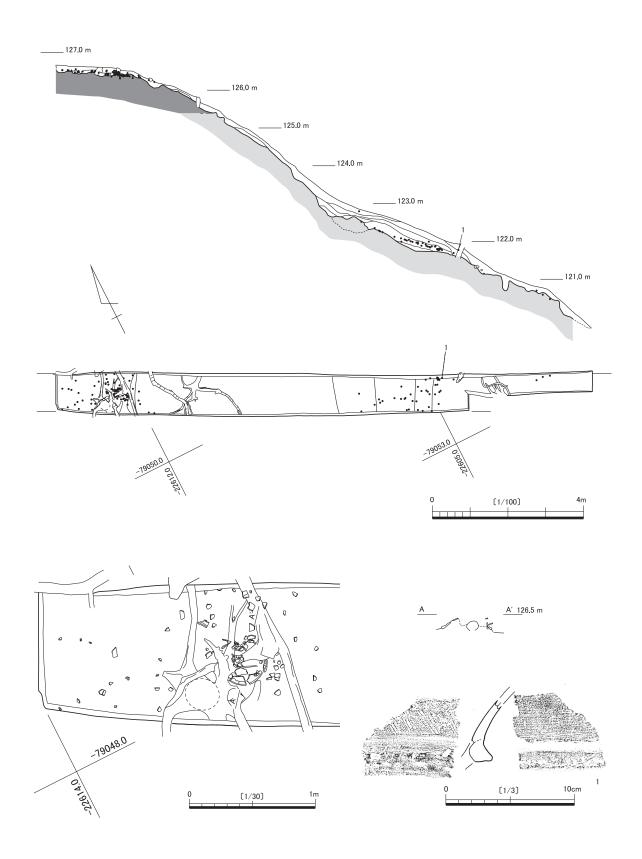
表土層(1、2層)を除去すると、墳丘斜面部は逗子層からなる墳丘面が確認されており、緩斜面上には流入土(3~8層)が良好に堆積していた。墳丘は、標高 121.8~122.6m で幅約 3.2~3.8m の緩傾斜面が確認されているが、やや不整な形状をなしている。この緩傾斜面は、1トレンチや2トレンチで確認された中段テラスよりも1mから2mほど標高が低く、下段テラスよりも0.3mから1mほど高い位置にある。この平坦面から西側は急峻な崖面へと至る。墳丘斜面は下半で約 45 度の急傾斜で立ち上がり、傾斜を変えながら標高126.3~126.4m で墳頂部平坦面へと至る。墳丘は逗子層を削り出した後、上部に盛土を施して構築しているが、盛土はブロック状の土丹を多量に含んでおり、断ち割りは行っていないため地山との境界が不明瞭であったが、墳丘面の観察では125.4 m付近から上は盛土と思われた。後に墳頂部に設定した17トレンチで行った断ち割り調査の結果から、後円部東側における地山と盛土の境は125.7m付近であり、概ね対応する。

また、墳頂部平坦面の縁辺部に相当するトレンチ西端では、地表から約20cm下でちょうど樹根に挟まれるような状態で埴輪列の一部にあたる埴輪基部がほぼ原位置を保った状態で発見された。基部の径は約40cmに復元でき、形状は1トレンチで確認された埴輪列と同様、基部外面が折り返しにより肥厚し、内傾して立ち上がる円筒埴輪である。被覆土を除去すると基部まで露出する状況であり、埴輪列設置に伴う掘方は確認できなかった。埴輪列を構成する遺物は、記録を取った後、埋戻し等の必要な措置を講じて現状保存とした。

後円部東側は、現況地形が歪で正円形をなさないため、崩落等の影響を受けている可能性が指摘されていたが、調査の結果、崩落を示すような痕跡は確認できなかったため、基本的には築造当初の状況を残していると思われた。ただし、後述する後円部墳頂部に設定した17トレンチにおいて地すべり跡が確認されていることから、何らかの影響を受けている可能性はあるものの、本トレンチ内で平成21年度に実施したボー



第20図 3トレンチ平面図・断面図〔1/100〕



第 21 図 3 トレンチ遺物出土状況〔1/100、1/30〕・3 トレンチ出土遺物〔1/3〕

リング調査の結果でも地すべり等の痕跡は確認されておらず、墳丘を大きく改変するようなものは想定できないと考えられる。

出土遺物 (第21 図、図版23)

緩傾斜面に流入した黒色土層(5層)中からは埴輪片が出土しているが、これらは墳頂部から流れ込んだものと思われる。遺物は219点取り上げたが、壺形埴輪胴部と思われる小片が多く、図化したのは1点のみである。1は壺形埴輪の口縁部片である。

4トレンチ (第22・23 図、図版4)

本トレンチは想定主軸線に直交する、前方部東側の墳丘斜面に相当する位置にあり、前方部東側墳裾の位置、段築の有無、墳丘斜面形状などの墳丘構造及び後世の改変等の有無を明らかにすることを目的として、平成 18 年度(第 3 次調査)に設定し、調査を行った。墳頂部平坦面端部から墳裾及びその東側に広がる平坦面まで幅 1m、長さ 20m のトレンチを設定した。調査面積は 20 ㎡である。

調査前の前方部東側は、前方部墳丘の高まりから東側に幅広の平坦地が広がっており、さらに東は急峻な 斜面へと至る。平坦地東端には南北に走る浅い溝状の落ち込みが観察された。

表土層(1、2層)を除去すると、墳丘斜面部に相当するトレンチ西半ではすぐに旧表土(9、10層)及び逗子層(11、12層)が確認されており、トレンチ内では盛土は確認されなかった。墳丘斜面は $17 \sim 20$ 度の傾斜で立ち上がっており、途中平坦面が確認されるものの、後世の削平を受けており、築造当時の墳丘面は失われていると判断された。一方墳裾付近には流入土・堆積土(5・6層)が良好に堆積しており、築造当時の状況がよく残されていると判断された。墳裾は標高 119.6m 付近、墳丘斜面が後世の削平を受けている影響により、現況地形から想定される墳裾位置よりも約 3m 東側の位置で確認された。なお、墳裾付近では一部砂質となっている 12層があり、サブトレンチにより断ち割り調査を行ったところ、逗子層に嵌入して広がる地山であることが確認され、泥岩風化層であると判断された。

墳裾から東側は平坦面が広がり、東端は突出する形をなして、急峻な崖面へと至るが、この突出部で南北に走る溝状の落ち込みの存在を確認していたが、調査の結果、地割れ跡であることが明らかとなった。この東端の突出部は、地割れ跡を境に 0.6m ほど地滑りを起こして下がっている。地割れ跡には $4\sim6$ 層が嵌入しており、層中から埴輪片が出土していることから、古墳築造後の地割れの可能性が高い。

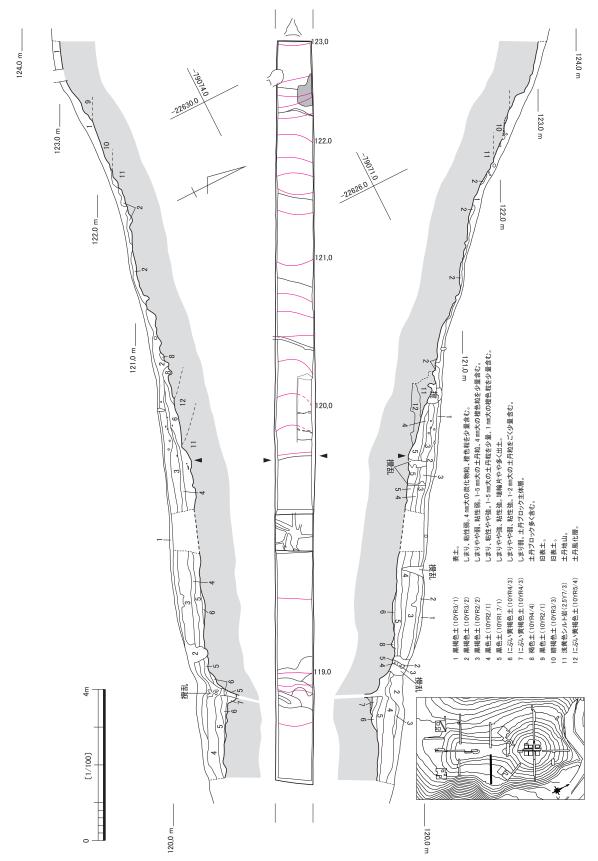
出土遺物 (第23図、図版32)

遺物は113点取り上げた。後世の改変を受けている墳丘斜面部からはほとんど遺物は認められず、墳裾付近から平坦面に堆積した土層中から出土している。遺物は壺形埴輪、円筒埴輪が出土しているが、小片が多く、図示しなかった。なお、東側平坦面の3・4層からは、1の中世末期のかわらけが出土している。

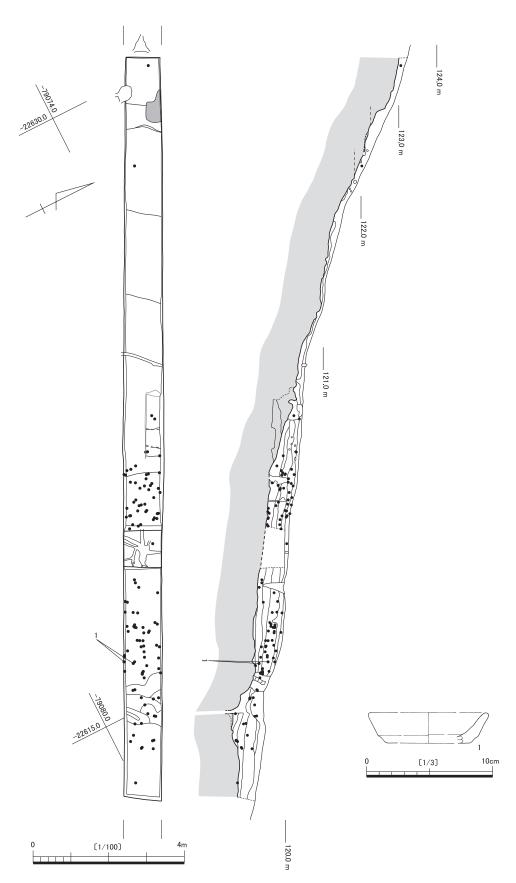
5トレンチ (第24~27 図、図版5~7)

5トレンチは西側くびれ部に位置しており、墳裾の位置、段築の有無、墳丘斜面形状などの墳丘構造及び後世の改変等の有無を明らかにすることを目的として設定し、平成19年度(第4次調査)に調査を実施した。

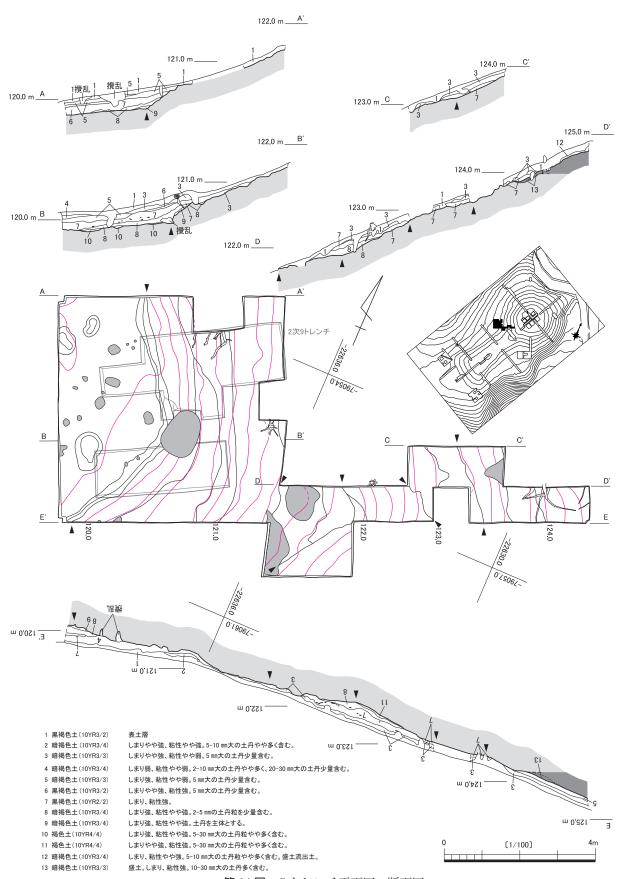
トレンチは、くびれ部墳裾を中心として、一辺 6m の正方形の調査区と、墳丘斜面部の調査のために墳頂部方面へと伸ばした幅 1m 長さ 8m の調査区を基本とし、樹木等を避けながら設定した。なお、墳丘斜面下



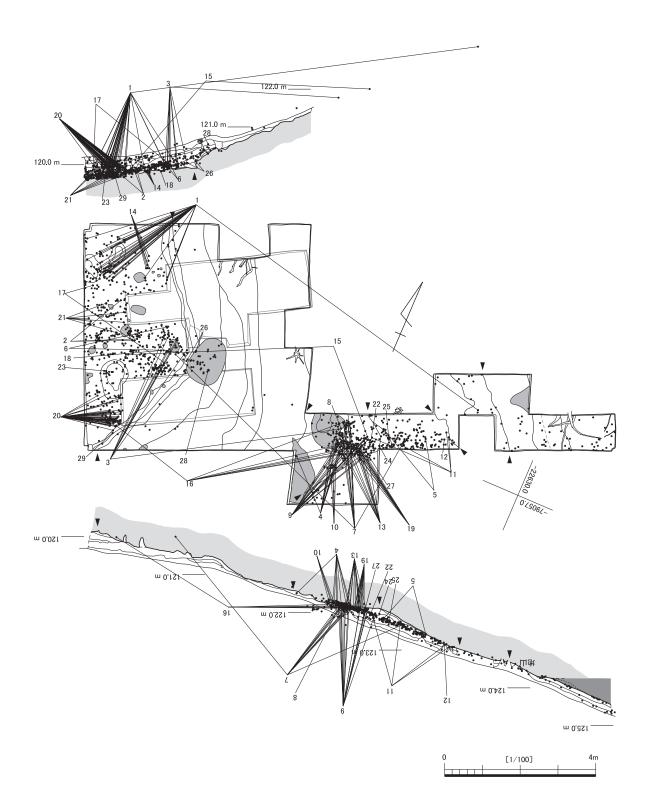
第22図 4トレンチ平面図・断面図〔1/100〕



第 23 図 4 トレンチ遺物出土状況〔1/100〕・4 トレンチ出土遺物〔1/3〕



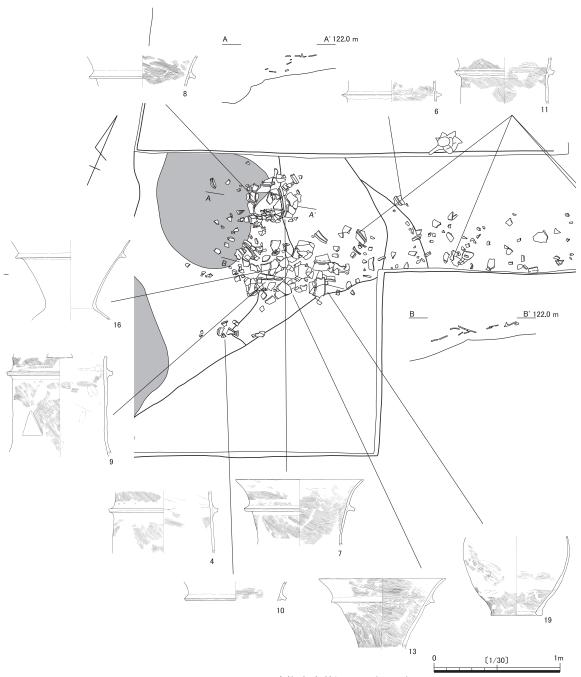
第24図 5トレンチ平面図・断面図



第25図 5トレンチ遺物出土状況 (1) [1/100]



第26図 5トレンチ遺物出土状況 (2) [1/30]



第27図 5トレンチ遺物出土状況 (3) [1/30]

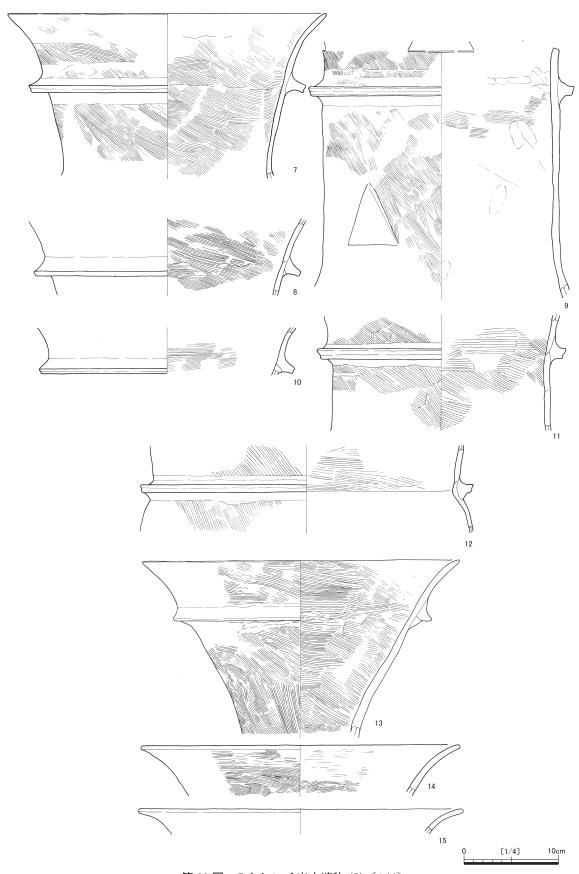
部で第2次調査9トレンチが重複していたため、先行して埋め戻し土を除去し、墳丘面や堆積土の状況についてその結果を参考に作業を行った。丘斜面部で確認された段築テラスの追及のため、一部拡張区を設定した。調査面積は47.4 ㎡である。

調査前の西側くびれ部は、地表面からも比較的明瞭に認識できる状態にあり、墳丘の遺存状況は良好であることが観察された。

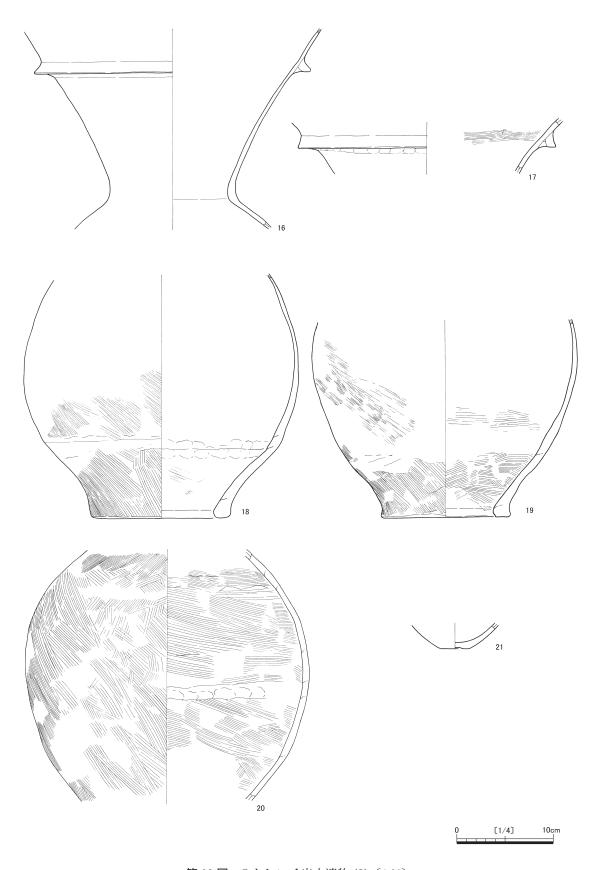
表土層 (1 層) を除去すると、土層の堆積は墳丘斜面部では薄いものの、下段テラス、中段テラス、及び 墳裾から平坦面にかけて流入土に相当する 7 層の堆積が広く認められ、築造当時の墳丘の状況を比較的良



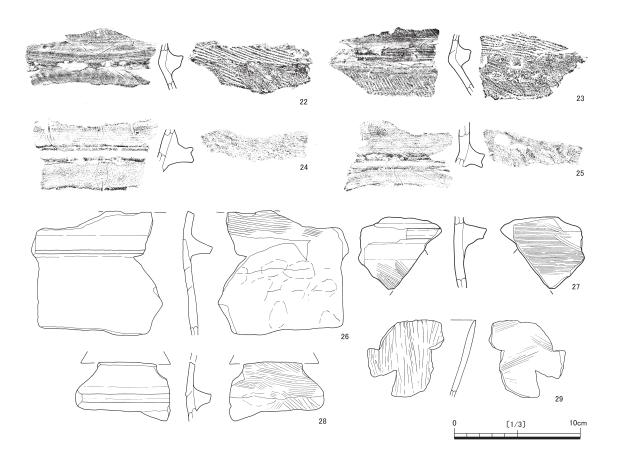
第28図 5トレンチ出土遺物 (1) [1/4]



第29図 5トレンチ出土遺物 (2) [1/4]



第30図 5トレンチ出土遺物(3) [1/4]



第31図 5トレンチ出土遺物(4)〔1/3〕

く残していると判断された。

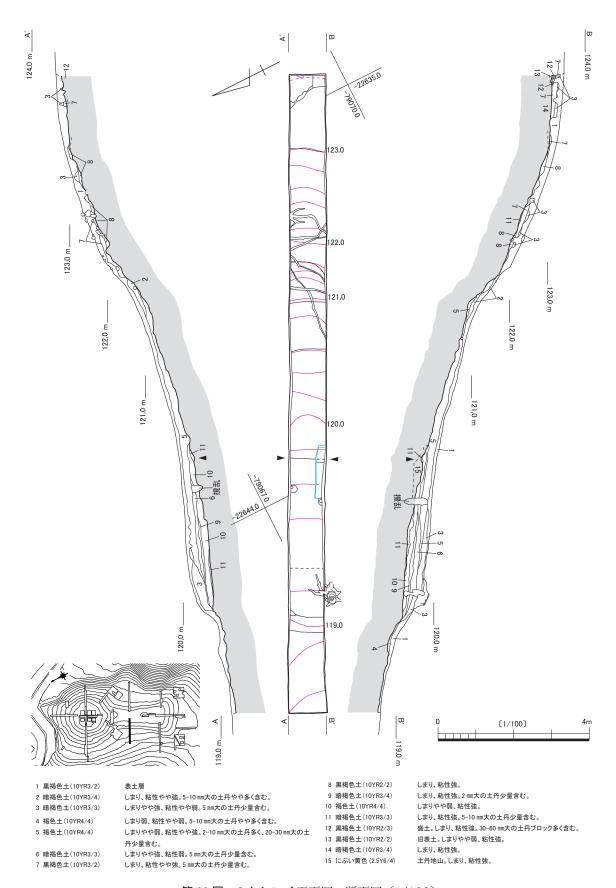
標高 119.7m から 119.9m にかけて逗子層を削り出して墳裾としており、トレンチ内でくびれ部を確認した。くびれ部は、明瞭な屈曲をなして構築されており、また墳裾には幅 $20 \sim 40 \,\mathrm{cm}$ 、深さ $3 \sim 6 \,\mathrm{cm}$ 程度の溝状の落ち込みが確認され、かなり明瞭に裾を作り出していることが明らかとなった。下段斜面はトレンチ北側の後円部側では墳裾から約 36 度の傾斜角で立ち上り、そこから約 24 度のやや緩やかな傾斜に変換しながら上方へ向っている。前方部では墳裾から約 16 度の傾斜で立ちあがるが、標高 $120.2 \sim 120.6 \,\mathrm{m}$ 付近において後世の削平による緩傾斜が形成されており、土丹を比較的多く含む墳丘削平時の残土(4 層)で覆われていることを確認した。なお、6 トレンチでもほぼ同様の状況が観察されている。下段テラスは、樹根による攪乱が部分的に認められるが、標高 $121.4 \sim 121.9 \,\mathrm{m}$ で確認され、 $1.2 \sim 2.0 \,\mathrm{m}$ の幅で前方部から後円部へ屈曲する状況が確認された。

中段斜面は約 27 度から 28 度の傾斜をもって立ち上がり、標高 123.2 \sim 124.7m で後円部を巡る幅 1.3 \sim 1.6m の中段テラスが確認された。

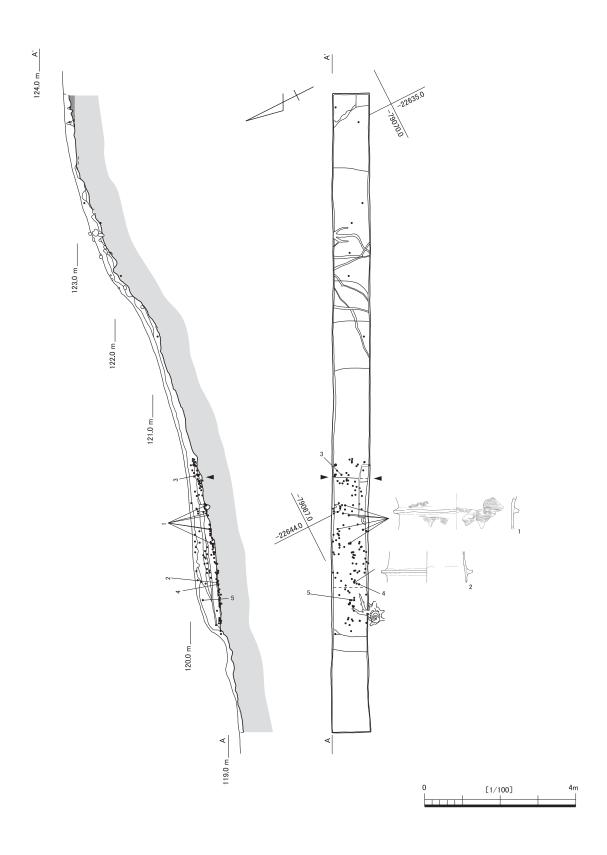
地山と盛土の境界は、断割り調査は実施していないため、表面観察によるが標高 123.2m \sim 123.7m 付近でなしていると判断された。

出土遺物 (第28~31 図、図版23~26)

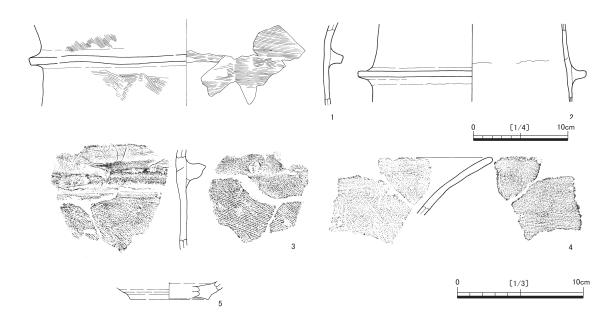
遺物は下段テラスや墳裾付近などの墳丘流出土中から、埴輪片が比較的まとまって出土しており、総計で 1267 点取り上げた。特に墳裾外側平坦面上に堆積する墳丘流出土からは、同一個体と思われる破片の集中



第32図 6トレンチ平面図・断面図〔1/100〕



第33図 6トレンチ遺物出土状況〔1/100〕



第34図 6トレンチ出土遺物〔1/4、1/3〕

箇所も複数認められたが、出土状況等から、いずれも墳頂部から流れ込んだものであり、原位置をとどめるものはないと判断された。1~12、22~28 は円筒埴輪である。1 は墳裾平坦面上から出土した。上部は欠損しているが、基部は全周し、比較的遺存状態は良好である。三角形の透かし孔が三孔確認されている。3、9 は三角形の透かし孔が突帯を挟んで上下段で確認されている。7 は円筒埴輪の口縁部である。突帯からラッパ状に開き、丸縁の口唇部へと至る。12、22、23 は、やや膨らみをもった体部から突帯を経て直立気味に伸びる特異な形状をなす円筒埴輪で、突帯裏には稜線がめぐる。13~20 は壺形埴輪である。口縁部はいずれも頸部から大きく開き、有段部は粘土帯貼付後、下から粘土を充填して指で押さえている。胴部~底部は卵形を呈し、底部はあらかじめ開口した状態で製作されたものである。21、29 は土器である。21 は壺ないし鉢形土器の底部、29 は直口壺の口縁部である。外面に粗いミガキが施されている。

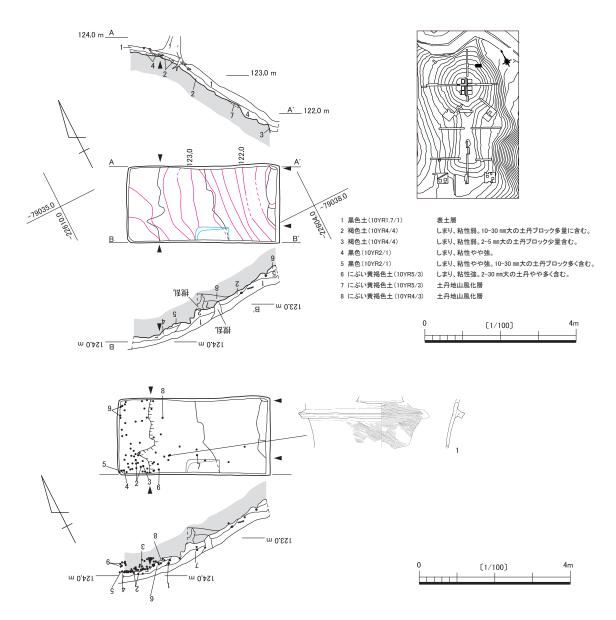
6トレンチ (第32・33 図、図版7)

6トレンチは墳丘推定主軸線に直交する前方部上に位置し、前方部西側の墳丘に相当する部分であり、4トレンチと対称の位置にある。調査は墳裾の位置、段築の有無、墳丘斜面形状などの墳丘構造及び後世の改変等の有無を明らかにすることを目的として平成19年度(第4次調査)に設定し、調査を行った。墳頂部平坦面端部から墳裾及びその西側に広がるわずかな平坦面まで幅1m、長さ16.9mのトレンチを設定し、調査を行った。

調査前の前方部西側は、墳丘の高まりとその西側にわずかな平坦地が広がっている状況で、その平坦地の 西側にはふれあいロードと呼ばれるハイキングコースが 1m ほどの落差をもって南北に走っている。

表土層(1 層)を除去すると、墳丘斜面部では逗子層及び黒色土層の旧表土が墳丘面をなしていることが確認された。トレンチ上端で、土丹ブロックを多く含む盛土がわずかに確認されている。

墳丘は標高 119.7m で地山を削りだして墳裾をなしているが、後世の削平により、下半部は 2m 程の幅で約 19 度の傾斜角度をもって緩やかに立ち上がる。土丹を多く含む褐色土層(5 層)は、墳丘削平に伴うものと考えられる。削平面から約 46 度の傾斜をもって一旦立ち上がり、上半は約 22 度の傾斜角度で墳頂



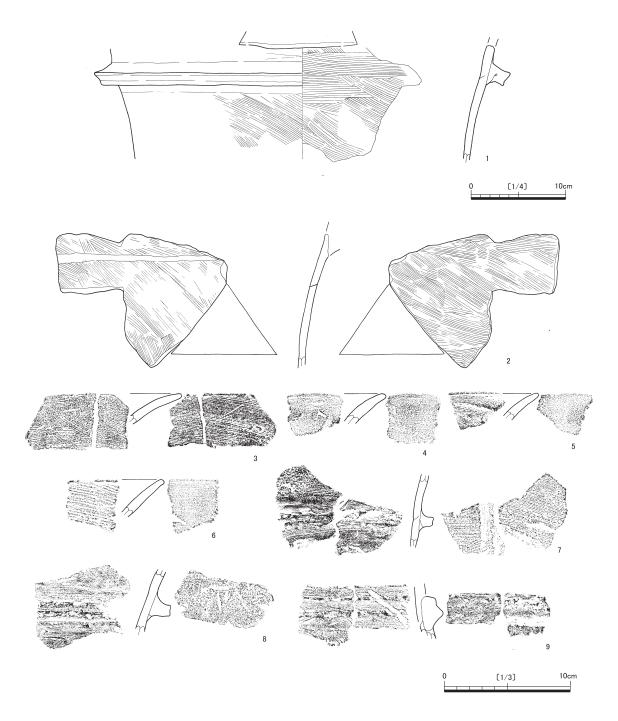
第35図 7トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況〔1/100〕

部に至る。墳丘は基本的に逗子層を削りだして構築しているが、標高 123.0m で黒色土層の地山が確認され、さらに墳頂部付近の標高 123.1m で土丹ブロックを多く含む盛土をわずかに確認した。

墳裾から西側の平坦面は、幅 4m ほどで現在のふれあいロードに向かって段差をなしているが、表土直下で確認されているため、本トレンチ内では後世の改変によるものなのか元来の地形ないし古墳築造にかかわるのかは判断できなかった。ただし後述する 9 トレンチの状況から、古墳築造時にはすでに段差地形をなしていたことが明らかとなっている。

出土遺物 (第34図、図版26)

遺物は 166 点取り上げた。墳丘斜面上部及び墳裾西側の平坦面に堆積した流出土中から埴輪片が出土しているが、小片が多く図示したのは 4 点である。 $1\sim3$ は円筒埴輪である。4 は壺形埴輪の口縁部である。

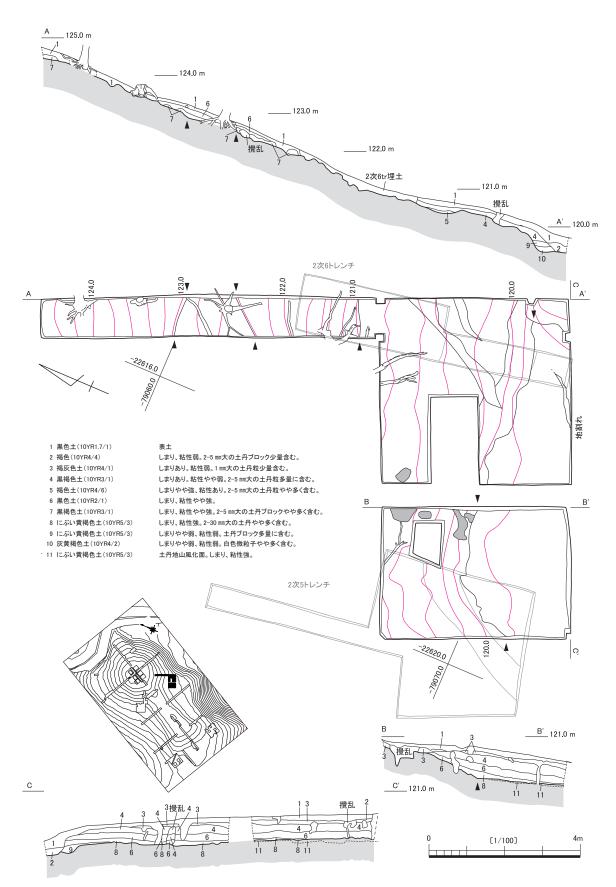


第36図 7トレンチ出土遺物〔1/4、1/3〕

5は瀬戸美濃の灰釉皿であり、墳丘斜面削平に伴うと思われる土層中から出土している。

7トレンチ (第35図、図版8)

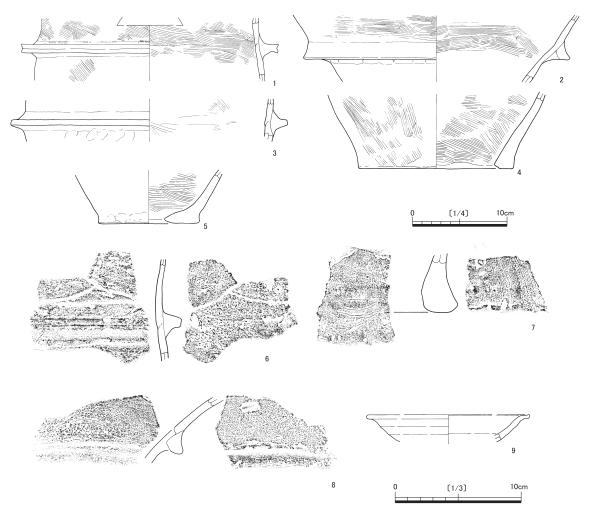
本トレンチは、後円部北西部の墳丘斜面部で、中段テラスに相当する位置に設定した。設定箇所は、整美な形状をなす西側後円部墳丘が急斜面をなして落ち込む東側との接点にあたる。東西の墳丘形状の差が何に起因するのかを確認することを目的に、平成19年度(第4次調査)に設定し調査を行った。調査は2×4mのトレンチを設定して行い、調査面積は約8㎡である。



第37図 8トレンチ平面図・断面図〔1/100〕



第38図 8トレンチ遺物出土状況〔1/100〕



第39図 8トレンチ出土遺物〔1/4、1/3〕

調査前の本トレンチ周辺の地形は、上述のとおり正円を描く後円部が東側に向かって急激に落ち込んでおおり、目視でも傾斜の変換が確認できる中段テラスが 2m ほどの段差をもって落ち込むため、途切れている状況を観察することができる。

墳丘斜面部では、表土層(1層)及び比較的最近まで繰り返し起こったと思われる墳丘斜面の崩落層(2層)の堆積を除去すると、逗子層からなる墳丘面が確認された。トレンチ上端では黒色土層(4層)の堆積が確認され、これを除去すると中段テラスが確認された。テラスは、標高 123.6~123.9m で地山を削り出して成形している。テラスは東に約 0.6m で約 34 度の傾斜角度をもって落ち込み、調査区東端の標高 $122.0 \sim 122.1m$ で再び傾斜が緩やかに変換する状況を確認した。下部の傾斜変換は 2 トレンチで確認された下段テラス($121.4 \sim 121.6m$)、及び 3 トレンチの緩傾斜面($121.8 \sim 122.6m$)の標高と比較的近いが、本トレンチ内で確認されたのは幅 10cm 程度である上、トレンチのさらに東側は崖面へと移行するため確定できなかった。また、地すべりにより地形が大きく改変を受けている可能性が想定されたが、調査の結果からは、地形改変を示唆するような事実は確認されなかった。

出土遺物 (第49 図、図版 26·27)

遺物は 71 点取り上げた。中段テラス上に堆積した墳丘流出土中から埴輪片が比較的まとまって出土している。 1、2、7 ~ 9 は円筒埴輪である。 1 は大形の円筒埴輪破片で、突帯の上段に三角形と思われる透かし穴の一辺が確認されている。 2 も大形の円筒埴輪であり、突帯が剥離しており、剥離面からハケ調整が確認されている。透かし孔は三角である。 3 ~ 6 は埴輪の口縁部である。破片のため、壺形か円筒かは分からない。

8トレンチ (第37・38 図、図版8・9)

本トレンチは東側くびれ部に位置しており、墳裾の位置、段築の有無、墳丘斜面形状などの墳丘構造及び 後世の改変等の有無を明らかにすることを目的に平成19年度(第4次)に調査を行った。

トレンチは、くびれ部墳裾を中心として、一辺 $5\times 9m$ の長方形の調査区と、墳丘斜面部の調査のために墳頂部方面へと伸ばした幅 1m 長さ 9m の調査区を基本とし、樹木等を避けながら設定した。なお、調査区が第 2 次調査 $5\cdot 6$ トレンチと重複していたため、先行して埋め戻し土を除去し、墳丘面や堆積土の状況についてその結果を参考に作業を行った。

調査前の東側くびれ部は、後円部側でやや抉れたような窪みが観察され、後世の改変を受けている可能性が想定された。

表土層(1 層)及び基本層序 II 層相当層(2 層)を除去すると、墳丘斜面部では直下に墳丘面が確認される状況であったが、墳裾から平坦面にかけては流入土の堆積が比較的良好に確認された。ただし 4 層は、 七丹粒を多く含む褐色土で、基本層序の III 層に相当する。層中からは瀬戸美濃の破片が 1 点出土している。

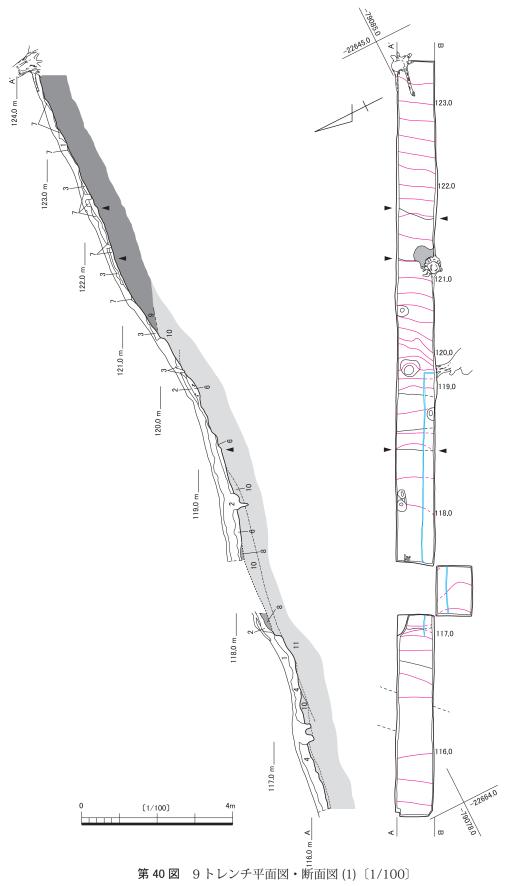
標高 119.4m から 119.9m にかけて逗子層を削り出して墳裾としており、トレンチ内でくびれ部を確認したが、5トレンチで確認した西側くびれ部に比べると、後円部と前方部の境界が不明瞭である。墳裾付近の逗子層は、砂質化した風化層が嵌入していることにより、初期流入土との判別が困難な箇所があったことも一因にある。

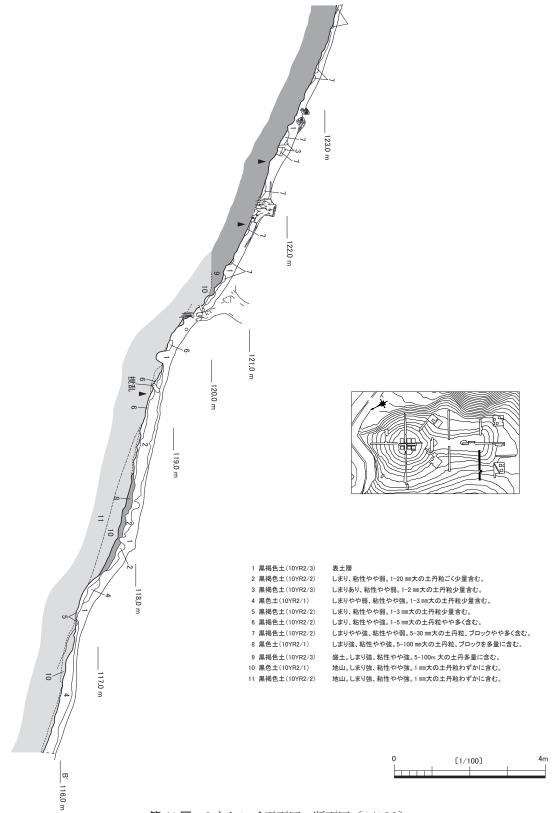
墳丘斜面は、後円部側で 22.5 度、前方部側で 27.5 度の傾斜をもって立ち上がる。標高 122.6~122.9m 付近において幅 $1.6 \sim 2.0$ の緩傾斜面が確認されたが、樹根等による攪乱の影響もあり、段築テラスと断定するにはやや根拠に欠ける。この平坦面は 3 トレンチ、7 トレンチで確認した平坦面に相当すると思われる。上段斜面は約 26 度の傾斜をもって立ち上がる。断ち割り調査を行っていないため盛土は把握できなかった。

出土遺物 (第39図、図版27)

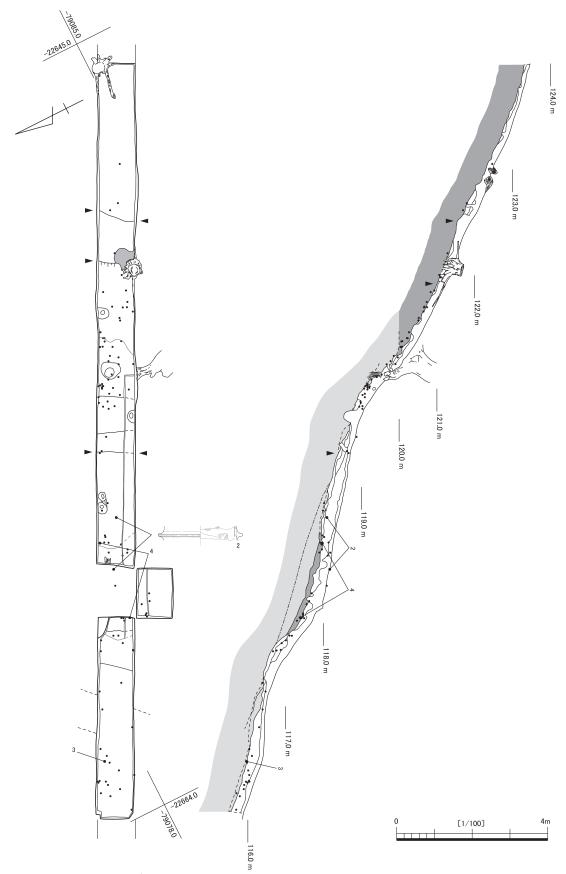
遺物は 486 点取り上げた。墳裾付近の墳丘削平土(4 層)及び墳丘流出土(6 層)を中心に遺物が出土している。図化したものは 9 点である。1、3、6 は円筒埴輪である。1 は突帯と並行して透かし孔が一辺確認されている。2、4、5、8 は壺形埴輪である。底部の造り出し方にバラエティーがみられるが、いずれも開口底部をなしている。9 の瀬戸美濃は折縁皿である。

なお、後円部墳裾東側の平坦面上では東西に走行する地割れ痕跡が確認され、これは 4 トレンチで確認 した地割れ痕跡へとつながるものと思われる。

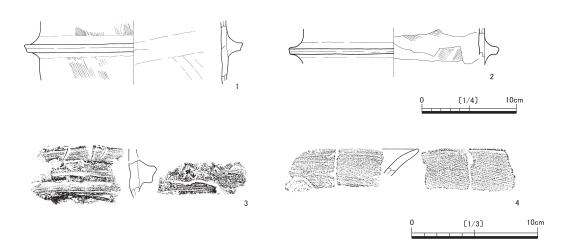




第41図 9トレンチ平面図・断面図〔1/100〕



第42図 9トレンチ遺物出土状況〔1/100〕



第43図 9トレンチ出土遺物〔1/4、1/3〕

9トレンチ (第40~42図、図版9)

本トレンチは前方部西側墳丘に相当し、墳丘頂部から墳裾、さらに一段下がった現在のふれあいロードまで、推定主軸線に直交して設定した。調査では前方部西側墳裾の確定及び段築の有無、さらに墳裾西側の平 坦面の先における段差地形の性格を確認することを目的に平成 20 年度(第5次調査)に調査を実施した。

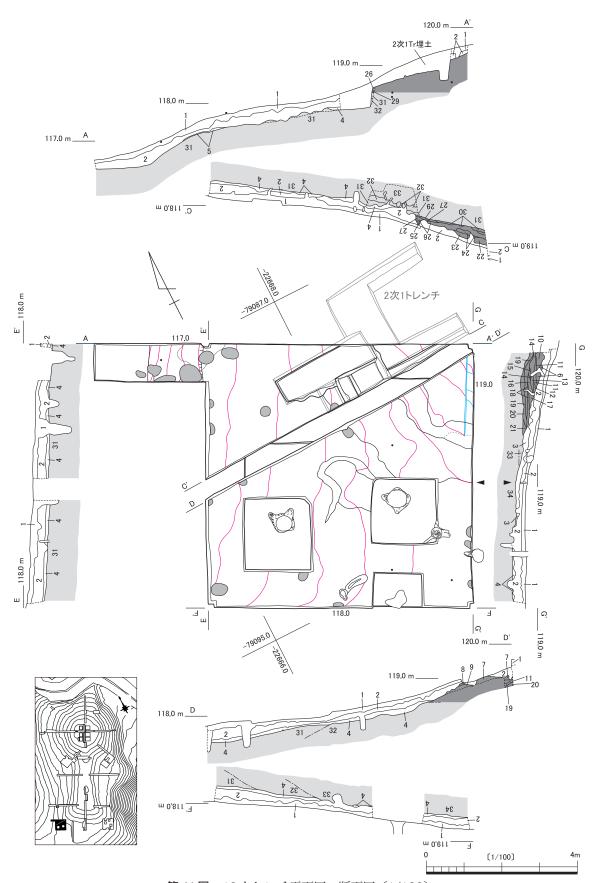
調査前の本トレンチ付近の現況は、細身の前方部側面が前方部隅角に向かってでやや幅広になる位置にあたる。平成19年度に実施した6トレンチの調査により前方部側面が後世の削平を受けた結果、現況で細くなっていることが明らかになっており、幅広の形状が残っている本トレンチ付近では、築造当時の墳丘が遺存している可能性が高いと想定された。また、墳丘の西側は約1.6m下がる段差地形をもって南北方向にふれあいロードが走っているが、6トレンチの調査では自然地形なのか人為的な加工によるものなのか確定できなかったため、今回確認のためトレンチを西側に伸ばして設定した。調査面積は約19.8㎡である。

表土層(1 層)を除去すると、堆積は薄いものの墳丘流出土(6、7 層)が確認され、墳丘面は概ね築造 当初の状況を残していると判断された。墳丘から一段下がったふれあいロード直下ではしまりが弱い黒色土 層(4、5 層)の堆積が認められた。

標高 118.4m で土丹ブロックを混入するが旧地表に相当する黒色土層(11 層)を削り出して墳裾となしており、約 30 ~ 35 度の傾斜角度で下段斜面が立ち上がる。標高 121.2 ~ 121.7m で幅約 1.2m の下段テラスが造り出されており、約 24 ~ 28 度の傾斜角度で上段斜面が立ち上がり墳頂部へ移行する。墳丘は標高 119.9 ~ 120.6m までは地山削り出しにより、それより上は盛土によって成形している。地山は色調により分層できるが、富士黒色土相当層のVII層からなる。墳裾から西に約 3.8m 離れた段差地形の肩部では、土丹ブロックを多く含む 8 層が層厚約 15 cm、幅約 2.4m から 2.8m にわたって広がる状況を確認した。同様の状況は、先述した後円部西側の 16 トレンチでも確認されており、これらは墳丘造成時の残土あるいは初期流入土と推定されるが、本トレンチ内の地山は黒色土層であることから、築造後ほどない段階での盛土流出土、もしくは人為的な盛土である可能性も想定される。いずれにしても 8 層は築造当初からあるいはさほど時間を経ない段階で堆積したものと考えられる、墳丘西側の段差地形は多少の改変は受けてはいるものの、古墳築造時の地形を残すものと判断された。

出土遺物 (第43 図、図版27)

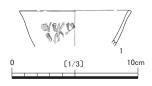
遺物は101点取り上げた。墳裾平坦面付近に比較的まとまって出土しているが、下段斜面から西側の緩



第44図 10トレンチ平面図・断面図〔1/100〕

1 黒褐色土(10YR2/3) 表土層 2 黒褐色土(10YR2/2) しまり、粘性弱。5-20 mm大の土丹粒やや多く含む。 3 黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性強。1-5 mm大の土丹粒少量含む。 4 黒色土(10YR2/1) しまり弱。粘性やや強。 5 黒褐色土(10YR2/1) 5-50 mm大の土丹粒、ブロック多く含む。 盛土。しまり、粘性やや弱。10 mm大の土丹わずかに含む。 7 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり強、粘性やや弱。5-20 mm大の土丹粒わずかに含む。 8 黒色土(10YR2/1) 盛土。しまり強、粘性やや弱。 9 黒色土(10YR2/1) 盛土。しまり強、粘性やや強。5 mm大の土丹粒わずかに含む。 10 黒色土(10YR2/1) 盛土。しまりやや強、粘性やや弱。5 mm大の土丹粒わずかに含む。 11 黒褐色土(10YR2/3) 盛土。しまり、粘性やや強。5-10 mm大の土丹粒やや多く含む。ローム質土と黒褐色土の混合土。 12 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまりやや強、粘性やや弱。10 mm大の土丹粒わずかに含む。 13 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまりやや強、粘性やや弱。 14 黒褐色土(10YR3/3) 盛土。しまり強、粘性やや強。5-10 mm大の土丹粒やや多く含む。ローム質土と黒褐色土の混合土。 15 黒色土(10YR2/2) 盛土。しまりやや強、粘性やや弱。5 mm大の土丹粒少量含む。 16 黒褐色土(10YR3/3) 盛土。しまり強、粘性やや強。5-10 mm大の土丹粒わずかに含む。ローム質土と黒褐色土の混合土。 17 暗褐色土(10YR2/3) 盛土。しまり強、粘性やや強。5 mm大の土丹粒わずかに含む。ローム質土と黒褐色土の混合土。 18 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり強、粘性やや強。5 mm大の土丹粒わずかに含む。 19 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり強、粘性やや強。1-20 mm大の土丹粒多量に含む。ローム質土も混ざる。 20 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり強、粘性やや強。1 mm大の土丹わずかに含む。 21 里褐色 + (10YR2/3) 感十二しまり、粘性強。 22 暗褐色土(10YR3/3) 盛土。しまり強、粘性やや強。5-10 mm大の土丹粒わずかに含む。ローム質土と黒褐色土の混合土。 23 黒褐色土(10YR2/1) 盛土。しまり強、粘性やや強。10 mm大の土丹粒わずかに含む。 24 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり強、粘性やや強。1-3 mm大の土丹粒わずかに含む。 25 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり強、粘性やや強。1 mm大の土丹粒わずかに含む。 26 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり、粘性強。 27 黒色土(10YR2/1) 盛土。しまり、粘性強。4mm大の土丹わずかに含む。 28 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり、粘性やや弱。6 mm大の土丹粒少量含む。 盛土。しまりやや強、粘性やや弱。4-6 mm大の土丹粒わずかに含む。 29 黒色土(10YR2/1) 30 黒色土(10YR2/1) 盛土。しまり、粘性強。10-20 mm大の土丹粒わずかに含む。 31 黒色土(10YR2/1) 富士黒色土相当層。しまり、粘性やや強。1 mm大の橙色粒、土丹粒わずかに含む。 32 黒褐色土(10YR2/2) 富士黒色土相当層。しまり、粘性やや強。1 mm大の橙色粒、土丹粒わずかに含む。 33 黒褐色土(7.5Y2/2) ソフトローム相当層。しまり非常に強、粘性強。ソフトローム相当層。

ソフトローム相当層。しまり非常に強、粘性強。1-5 mm大の土丹粒やや多く、3 mm大の橙色粒少量含む。



第45図 10トレンチ出土遺物〔1/3〕

傾斜地形に堆積した墳丘流出土中からも埴輪片が出土している。 $1 \sim 3$ は円筒埴輪である。 2 は突帯剥離面にハケ調整が施されている。 4 は埴輪の口縁部破片である。

10トレンチ (第44図、図版9・10)

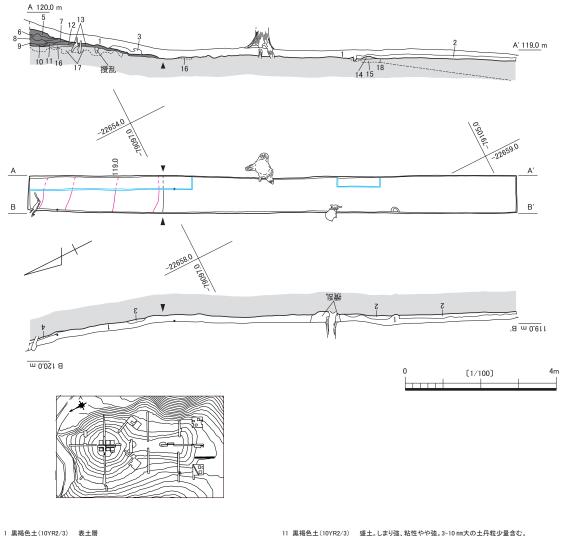
34 黒褐色土(7.5Y3/2)

本トレンチは、前方部西側墳丘の隅角に位置し、隅角の位置、形状を確認し、前方部幅を確定することを目的に、平成20年度(第5次調査)設定し、調査を行った。調査区は隅角位置想定箇所を中心に、樹木を避けながら一辺7mのトレンチを設定したほか、墳丘西側の段差地形の性格を確認するため、幅1m、長さ3mで調査区を延長した。調査面積は39.8㎡である。なお、本トレンチは第2次調査1トレンチと一部重複しているため、最初に重複部分の埋土を除去した。

調査前のトレンチ周辺は、前方部西側隅角の墳丘が視認できる状況であり、遺存状況は良好であるように思われた。墳裾から西側にはくびれ部からの段差地形が続き、南北方向にふれあいロードが走っている。 表土層(1層)を除去すると、しまりの粗密、粘性の強弱により分層可能な黒色土層(2~4層)の堆積が認められたが、いずれも墳丘流出後に堆積した土層である。トレンチ内の各所にみられる攪乱は、そのほとんどが自然薯の堀り穴と考えられる。

墳丘は、トレンチ北東隅で旧表土に相当する黒色土層を整地した後、土丹ブロックを多く含む層と黒色土層を積み上げた盛土層(7~30層)が確認された。盛土層は17度の傾斜で立ち上がるが、他のトレンチで確認した前方部西側側面や前方部前面の墳裾位置と比較すると、想定される位置よりもかなり内側にあり、本トレンチ内の墳丘盛土は削平ないし流出していると考えられる。標高118.4mで傾斜の変換が認められるが、上述の理由により墳裾は本来さらに外にあり、遺存していない。

墳丘西側の段差地形の肩部では、9トレンチ同様、土丹ブロックが混ざる5層が確認された。ただし土丹ブロックは、地山の黒色土層に面的にではあるが疎らに確認される状況であり、明確な層をなしているとは



2 黒褐色土(10YR2/2) しまり弱、粘性やや強。 盛土。しまり強、粘性やや強。1-5 mm大の土丹粒やや多く含む。 3 黒褐色土(10YR2/2) しまり強、粘性やや強。 13 黒褐色土(10YR3/3) 盛土。しまり、粘性強。2-10 mm大の土丹粒多量に、20-30 mm大の土丹少量 4 黒褐色土(10YR2/3) しまり強、粘性やや強。5-10 mm大の土丹粒少量含む。 含む。 5 黒褐色土(10YR2/3) 盛土。しまり強、粘性やや強。5-30 mm大の土丹粒多く含む。 14 黒褐色土(10YR2/3) 地山。しまり、粘性強。10-50 mm大の土丹ブロック多く含む。 6 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり強、粘性やや強。5-30 mm大の土丹粒やや多く含む。 15 暗褐色十(10YR3/4) 地山。しまり、粘性強。5-20 mm大の十丹粉やや多く含む。 7 黒褐色土(10YR2/3) 盛土。しまり強、粘性やや強。5-30 mm大の土丹粒やや多く含む。 16 暗褐色土(10YR3/4) 地山。しま強、粘性やや強。5-20 mm大の土丹粒多く含む。 17 褐色土(10YR4/6) 8 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり、粘性強。10-50 mm大の土丹ブロックわずかに含む。 地山。しまりやや弱、粘性やや強。1-50 mm大の土丹多く含む。 9 黒褐色 + (10YR2/3) 盛十。しまり強、粘性やや強。5-30 mm大の十丹粉多く含む。 18 にぶい黄色シルト岩 逗子層。 10 黒褐色土(10YR2/2) 盛土。しまり、粘性やや強。3-20 mm大の土丹粒やや多く含む。 (2.5Y6/4)

第46図 11トレンチ平面図・断面図〔1/100〕

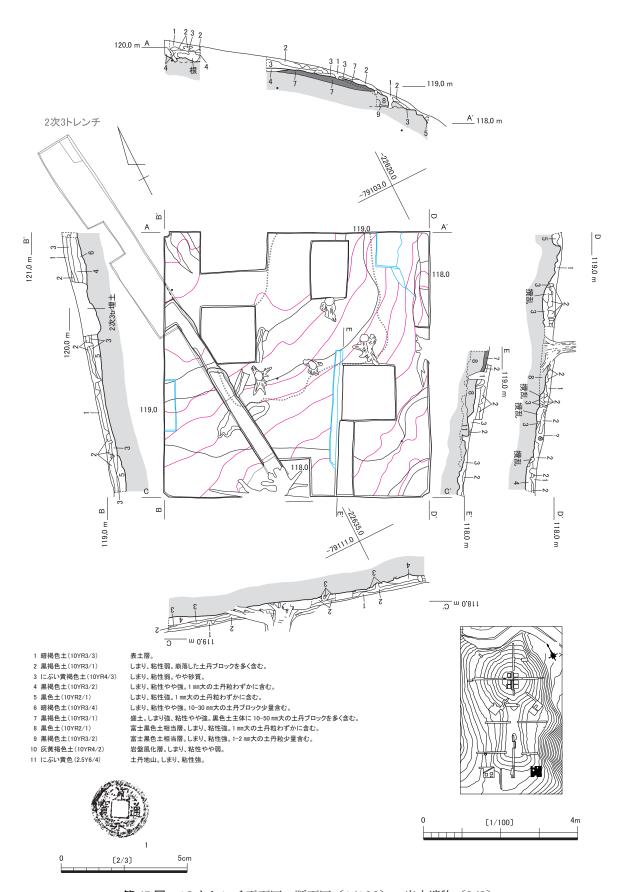
言い難い状況であった。肩部から約36度の傾斜角度で下がり、自然地形と思われる緩傾斜面へと至る。 出土遺物(第45図、図版32)

遺物は流出土中から埴輪小片が4点出土しているほか、近世陶磁器が1片出土している。

11トレンチ (第46図、図版10)

本トレンチは、前方部前面、想定主軸線よりも西側に位置し、前方部前面の墳裾位置を確認することを目的に、平成20年度(第5次調査)設定し、調査を行った。また、前方部前面には平坦面の広がりが認められるため、関連する遺構等の有無についても確認に努めた。調査区は想定主軸線に並行して、幅1m長さ13mのトレンチを設定した。調査面積は13㎡である。

調査前のトレンチ周辺は、スギ・ヒノキ植林に覆われており、このときの改変を受けている可能性も想定



第 47 図 12 トレンチ平面図・断面図〔1/100〕・出土遺物〔2/3〕

されたが、現況では遺存状態の良好な前方部墳丘と前方部前面に広がる平坦面が観察された。

表土層(1 層)を除去すると、平坦面では南側で黒褐色〜褐色土の地山(14 ~ 17 層)が、北側では逗子層(18 層)の広がりが確認された。このことから、古墳築造以前の本トレンチ周辺は、北側から南側へ下がる地形をなしていたと考えられる。

墳丘はトレンチ北側の一部で確認された。墳丘は、地山を平坦に成形した後、盛土によって構築されていることが確認された。標高 118.8m が盛土端で、墳裾をなしている。盛土によって成形された墳丘は、約12 度の傾斜角度をもって立ち上がるが、表土直下で確認されているため、一部流出している可能性がある。前方部南側の平坦面上では関連する遺構等は検出されなかった。

遺物は表土中から埴輪小片が2点出土している。

12トレンチ (第47図、図版10)

本トレンチは、前方部東側墳丘の隅角に位置し、隅角の位置、形状を確認し、前方部幅を確定することを目的に、平成20年度(第5次調査)に設定し、調査を行った。調査区は隅角位置想定箇所を中心に、樹木を避けながら一辺7mのトレンチを設定した。調査面積は40.2㎡である。なお、本トレンチは第2次調査3トレンチと一部重複しているため、最初に重複部分の埋土を除去し、参考とした。

調査前の前方部東隅角付近は、墳丘斜面から南側に向かって傾斜しており、墳裾と考えられる傾斜変換は 認められなかった。また、前方部東側面は急傾斜の崖面へと至る状況が観察された。周辺はスギ・ヒノキ植 林に覆われており、このときに改変されている可能性も想定された。

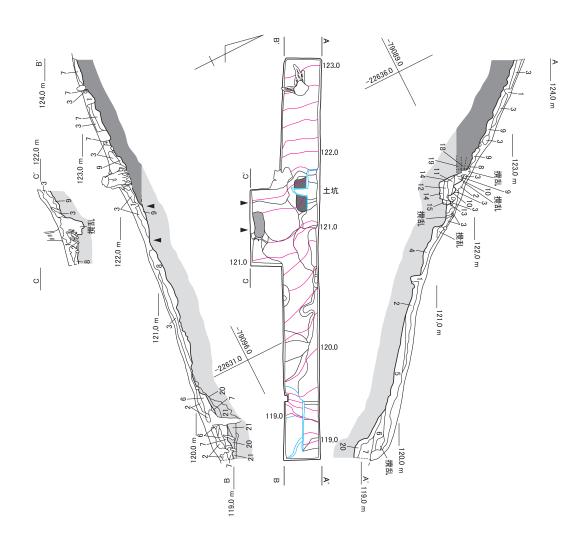
表土層(1 層)及び流入土・堆積土(2~6 層)を除去すると、トレンチ北半で黒色土(8・9 層)地山が、トレンチ南側で逗子層(11 層)の広がりが確認された。トレンチ中央北半では黒色土を主体としながらも土丹ブロックを多く含む盛土(10 層)が確認された。断ち割り調査を部分的に行ったところ、盛土直下には黒色土地山が堆積しており、盛土は黒色土層上面の標高 118.9m から約 cmの厚さをもって部分的に広がる状況が確認された。盛土・地山面は北から南に向かって約 11 度の勾配をもって下がる緩やかな傾斜をなしており、前方部前面側に明確な墳裾は確認できなかった。トレンチ周辺にはスギ・ヒノキ植林による改変の可能性も考えられるが、墳丘からそのまま自然の傾斜面へと移行する地形から、そもそも墳裾を削り出して平坦面をなす余地があったとは考えにくい。また前方部東側は、約 24 度の傾斜で下がりながら急斜面に移行する地形をなしており、やはり墳裾を作り出している状況は確認できなかった。以上のことから前方部東隅角は元来明確な墳裾をつくり出ていなかったものと思われる。

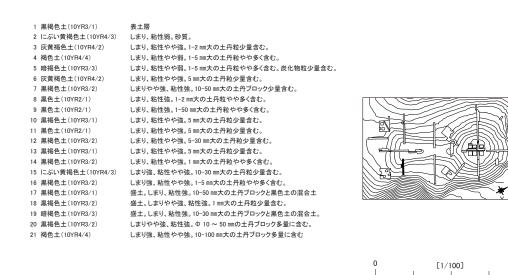
出**土遺物** (第 47 図、図版 32)

遺物は埴輪小片が一片出土したのみである。他に表土中から寛永通宝が一枚出土している。

13トレンチ (第48図、図版10・11)

本トレンチは、前方部東側の墳丘斜面部に位置し、墳丘裾部を確認し、段築の有無など墳丘の立面形態を明らかにすることを目的として平成20年度(第5次調査)に設定し調査を行った。前方部東側は後世の削平により、本来の墳丘よりも現況では細身になっているが、本トレンチ周辺は幅広になっており、築造当時の墳丘が遺存している可能性が高いと想定された。また、墳丘のすぐ東側は急峻な崖面となっており、平坦面の広がりはほとんどない位置にあたるため、墳頂部から東側の崖面まで、幅1m、長さ10.6mの調査区





第48図 13トレンチ平面図・断面図〔1/100〕

を設定した。調査面積は12.4 ㎡である。

表土層(1 層)及び流入土(2~8 層)を除去すると、墳丘斜面が確認された。ただし、墳丘斜面下部の北半では、後世の改変を受けており、地山まで削り込まれている。削平範囲では基本層序皿層に相当する土層(4・5 層)が堆積し、墳丘東側の4トレンチ及び8トレンチで共通してみられ、細見の前方部が撥形に開く現況地形と対応することが確認された。築造当初の墳丘面を遺存していると考えられるトレンチ南半では、標高120.2mで傾斜変換が認められるが、他のトレンチで確認された墳裾位置から推定される箇所よりも内側になり整合しない。したがって、推定される墳裾位置はトレンチ東端付近に相当するが、土丹ブロックを多く含む土層(2・21 層)が斜面を形成しており、崖面となっている。この層をさらに掘り下げると、土丹層の急傾斜面となり、標高118.9mで幅1m程の平坦面が存在するが、くびれ部や前方部で確認された墳裾よりも1m程下がる上、墳丘築造後に堆積する黒色土層は確認されなかった。したがって、土丹ブロックを含むこの土層は、古墳築造以前の小規模な地すべりによる崩落層の可能性が高い。以上のことから本トレンチ付近では明確な墳裾は元来造り出していなかったと考えられる。

墳丘斜面では段築テラスが確認されている。下段斜面は約18度の傾斜角度で立ち上がり、標高121.2~121.4mで幅約1mの下段テラスへと至る。上段斜面は約26度で立ち上がり、墳頂部へと至る。墳丘下半部は逗子層を削り出しているが、テラス面に相当する標高121.4mより上部は盛土によって構築されていることが確認された。

下段テラス上では土坑が 1 基検出されている。土坑はトレンチから北側に延びるが、先述の削平により、遺存していない可能性が濃厚である。確認した範囲で南北長 0.6m 以上、東西幅約 0.8m をはかる。サブトレンチを入れたところ、逗子層を断面逆台形状に掘りこんでおり、底面と側面には土丹ブロックを多く含む土層($12\sim15$ 層)が見られ、その中に堆積した黒色土は断面箱形をなしていることから、人為的な堆積をなしていると判断された。墳丘盛土との前後関係については樹根の攪乱により確認できなかった。本土坑は埋葬施設の可能性も考えられるが、副葬品等遺物も一切発見されず、性格は不明である。

出土遺物

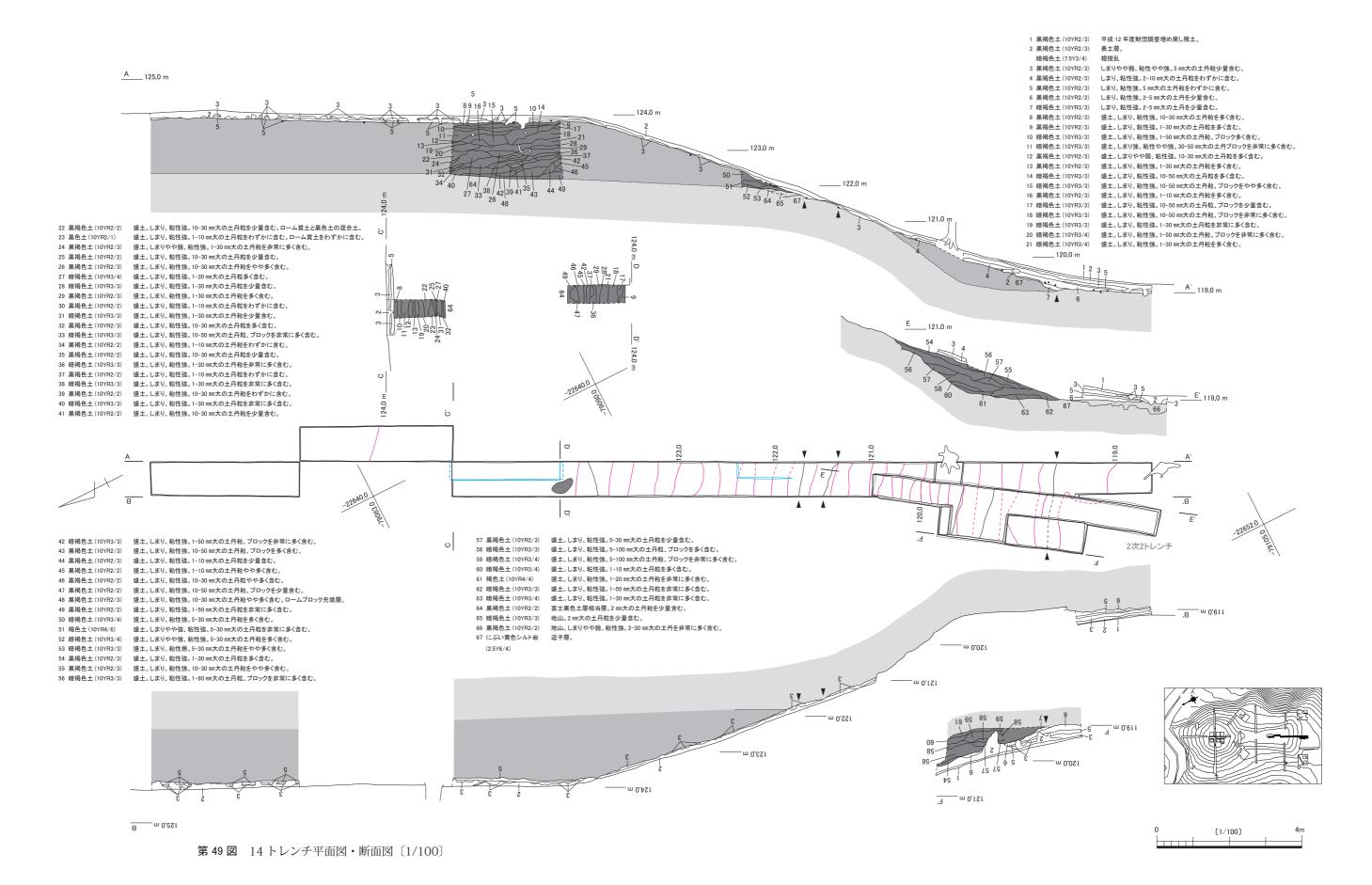
本トレンチからは埴輪等の遺物は出土しなかった。

14トレンチ (第49図、図版11~13)

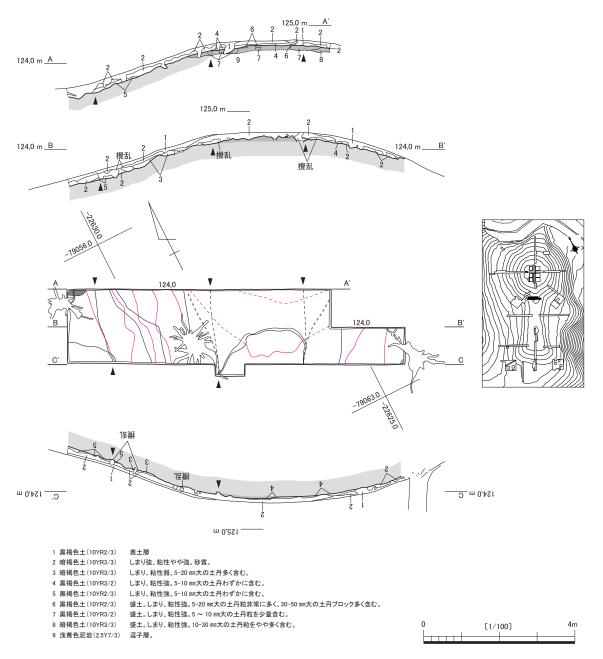
14トレンチは、想定主軸線上に位置しており、前方部墳頂部から墳裾まで設定した調査区である。前方部前面の墳裾、段築の有無を確認し、墳丘形態の詳細を明らかにすると同時に、前方部墳頂部における埋葬施設、埴輪列の有無を確認することを目的として設定し、平成21年度(第6次調査)に調査を実施した。前方部墳頂部から墳裾まで、幅1m、長さ28.1mの調査区を設定し調査を行った。なお、本トレンチは2次調査2トレンチと重複しているため、先行してその埋戻土を除去し、参考に作業を行った。調査面積は34.8 ㎡である。

表土層 $(1 \sim 2 \, \text{Pm})$ を除去すると、全体に黒褐色土 $(3 \sim 6 \, \text{Pm})$ の堆積が確認された。墳裾付近には、初期流入土 $(7 \, \text{Pm})$ の堆積が確認され、築造時の姿をよく残していると考えられる。

2次調査埋戻し土を除去し、前方部先端部、墳裾付近の構築状況を確認したところ、逗子層を削り出した後、泥岩ブロックと黒色土を用いた盛土を断面三角形状に施している状況が確認された。墳裾を作り出す際の盛土の積み方を観察すると、墳裾側に若干山状の盛土を構築した後、さらに内部に土を盛って墳丘を構築



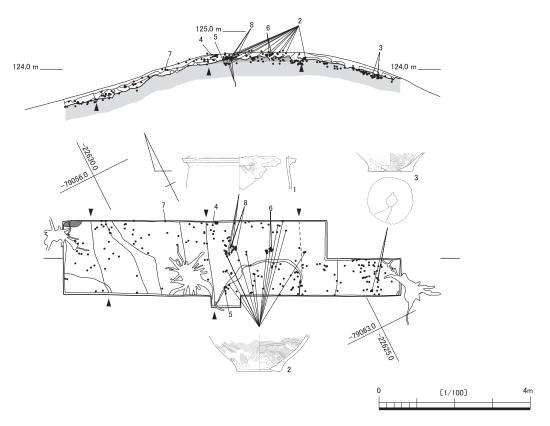
65



第50図 15トレンチ平面図・断面図〔1/100〕

する状況が確認された。 墳裾は、標高 119.1m で明瞭な傾斜変換をなしている。

墳丘下段斜面は、約20度の傾斜をもって立ち上がり、標高121.5~121.7m付近で幅0.7mを測る下段 テラスが確認された。上段斜面は約18度の傾斜持って立ち上がり、標高123.7~123.8mで墳頂部平坦 面に至る。墳頂部はトレンチ内では標高123.8~123.9mでほぼフラットな平坦面をなしており、さらに 北側で緩やかに下がりながら鞍部をなしている。墳丘の断ち割り調査を行ったところ、テラスから上部、標高122.2~122.4 mから上は盛土によって構築されていることが確認された。盛土下部からは築造前の旧地 表に相当する黒色土層が確認されており、一旦旧地表面を平坦に成形した後、まず土丹ブロックを多く含む 土層と黒色土主体層を交互に積み上げ、上部では土丹主体層を均質に積み上げていることが確認された。各層は墳丘面側から内側に傾斜するように積み上げられていることから、墳裾付近と同様にまず墳丘面側に山



第51図 15トレンチ遺物出土状況〔1/100〕

城に盛土を施しながら内部に土を積み上げていったものと考えられる。なお、埋葬施設及び埴輪列は確認されなかった。

遺物は墳裾及び墳頂部付近の覆土中から、20点の埴輪片が出土しているが、いずれも小片のため図示しなかった。

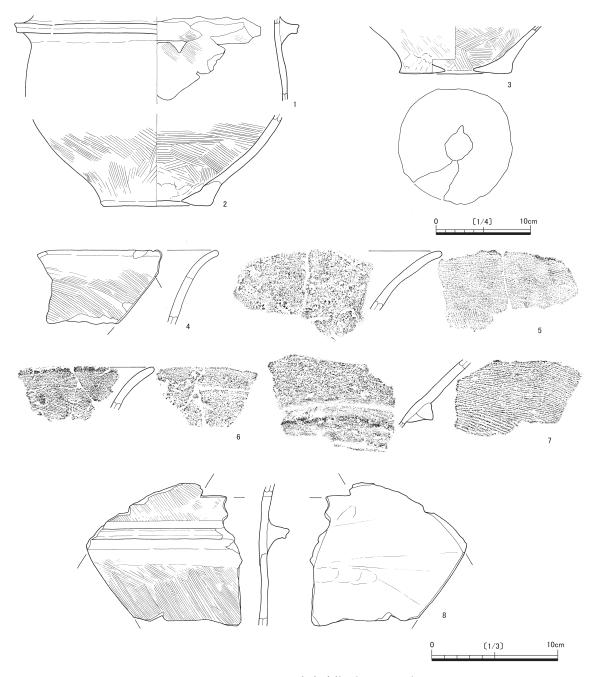
15トレンチ (第50・51 図、図版13・14)

15トレンチは、前方部墳頂部と後円部墳頂部をつなぐ隆起斜道上に設定した調査区であり、後円部段築中段テラスの、及び埴輪列の有無を確認することを目的に平成21年度(第6次)に調査を実施した。

想定主軸線に直交するように、幅 1 m、長さ 7.6 mの調査区を設定した後、さらに幅 1 m、長さ 6.6 mの範囲で北側に拡張した。調査面積は 16.4 m である。

表土層(1 層)及び流入土(2~5 層)を除去すると、トレンチ西側では逗子層(9 層)を削り出したテラスが確認された。テラスは標高 123.2~123.6 mをはかり、後円部側から前方部に向かって弧を描くように伸びていくが、樹木の根により南側が攪乱されており、前方部への接続状況は明瞭ではない。テラスの幅は後円部側で 1.7 m、前方部側で 0.7 mをはかる。一方トレンチ東側は、調査区内ではテラスは確認できなかった。テラスは調査区よりも東側に存在する可能性があるが、当該箇所は後世の削平により墳丘面が遺存していないため、さらなる調査区の延長はしなかった。

テラスより上、標高 125.1~125.7 m付近から上部は盛土が確認された。盛土は土丹ブロックと黒色土を



第52図 15トレンチ出土遺物〔1/4、1/3〕

用いて施されているが、樹根等の影響によりしまりが弱く、トレンチ北側は掘り下げた後、土層観察により その存在が確認された。隆起斜道は明瞭な平坦面をなしてはいないものの、約3mの幅で前方部から後円 部に向かって約10度の傾斜をもって立ち上がっている。

出土遺物 (第52図、図版28)

本トレンチからは、総計 254 点の埴輪片が出土している。埴輪列が存在した可能性があるが、原位置を とどめるものはなく、いずれも後円部側から流れ込んだ状況を呈して出土している。1、4、8 は円筒埴輪 である。4 は口縁部の破片だが、三角形と思われる透かし孔の一辺が残存する。今回の調査で口縁部に透か し孔が存在することが確実な例はこの1点のみである。8は突帯の上段に三角形の透かし孔がみられる。2・3、7は壺形埴輪である。2・3は底部である。底部は中央に向かって粘土が薄くなり、開口している。

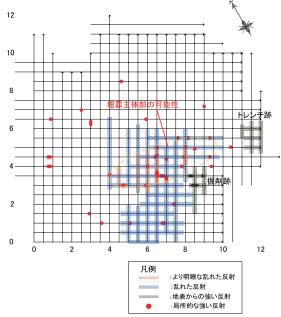
17トレンチ(第 53 ~ 58 図、図版 14 ~ 20)

後円部墳頂部平坦面上に設定した調査 区である。本調査区は、後円部墳頂部に おける埋葬施設の盗掘の有無、墓壙の位 置・規模・形態の確認及び隆起斜道部に おける埴輪の配列状況の確認を目的とし て平成21年度(第6次)に調査を行っ た。

調査にあたっては、事前に地下レーダー探査を応用地質株式会社が委託により実施している。当初平成15年度に実施したデータを用いてタイムスライス解析を実施することとしたが、当時の測定結果から石室や石郭を持たないタイプの埋葬主体部である可能性が高いこと、後円部には樹木や樹根も多いことなどから、できるだけ細かく測定をおこなう必要があると判断されたため、再度400MHzアンテナを用いて60cm格子状に測定をおこない、タイムスライス解析を実施することとした。

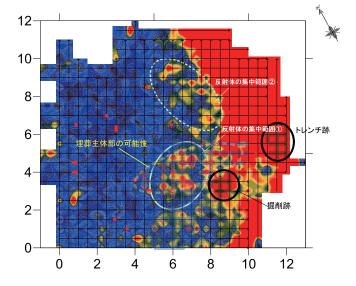
測定で得られた地下レーダー断面記録 (プロファイル記録)は、距離程を等間 隔に処理し、深度については平成15年 度の調査で求めた地盤の電磁波伝播速度 6.9cm/nsecより換算した。また、地形 の変化があるため、既存の地形図の等高 線から標高を読み取り、すべての記録に

<プロファイル記録からの解釈>



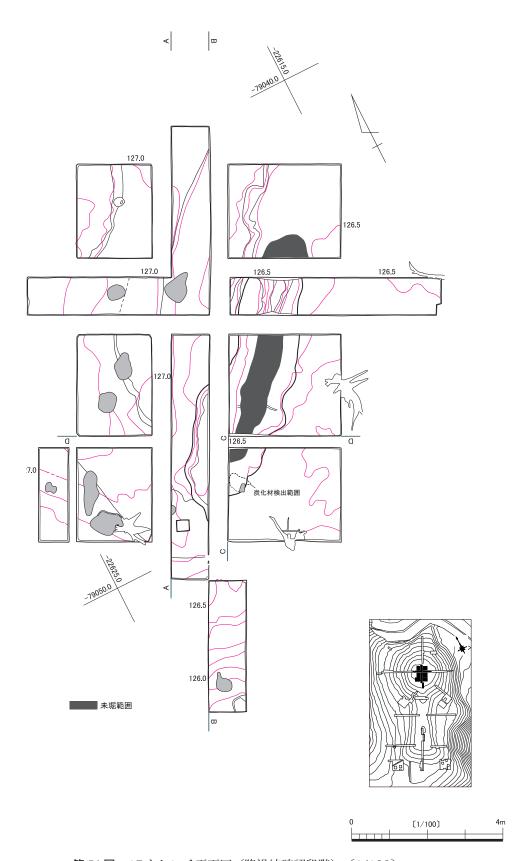
プロファイル記録からは、乱れた反射の分布範囲が填頂部の南東側に集中する傾向が 見られる。このうち、より明瞭な乱れた反射の分布範囲は、境頂部の中央やや南よりに 東西方向に分布しており、この範囲が最も埋葬主体部の可能性が高い。 この他に、地表付近からの強い反射の分布範囲が2箇所あるが、これらはトレンチ 跡、後世の掘削跡と考えられる。

<タイムスライス結果との重ね合わせ> T.P.=126.5m

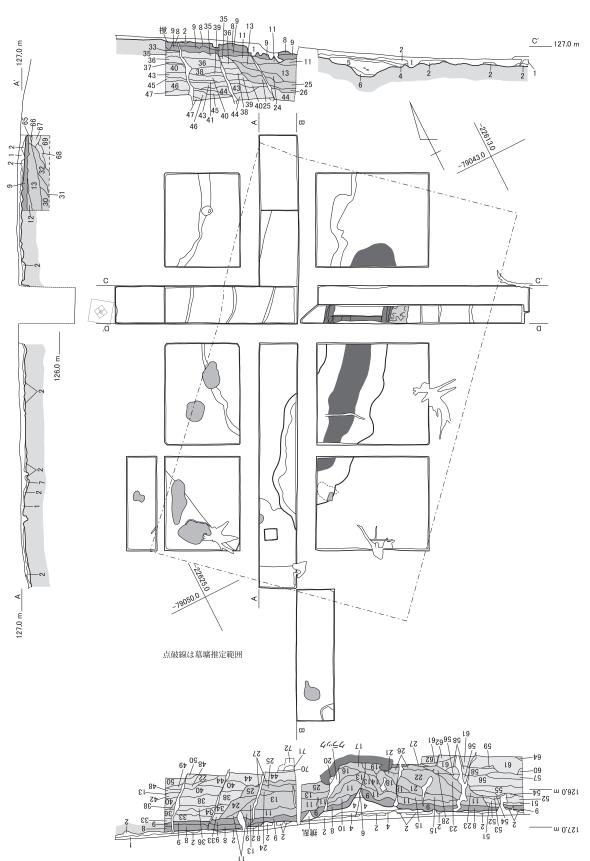


I.P.126.5mのタイムスライス結果からは、反射体が集中する範囲が2箇所指摘できる。 このうち南側は、プロファイル記録から指摘した箇所とほぼ同じ位置にあたる。このこと から、両方の結果(解釈)から指摘されたこの箇所は、埋葬主体部の可能性が高いと言え る。

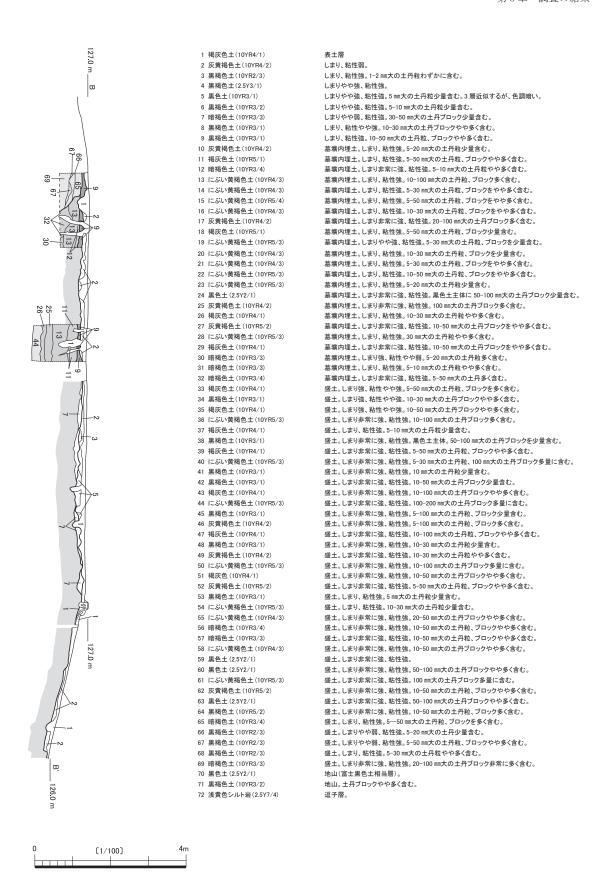
第53図 プロファイル記録とタイムスライス結果 の総合解釈図



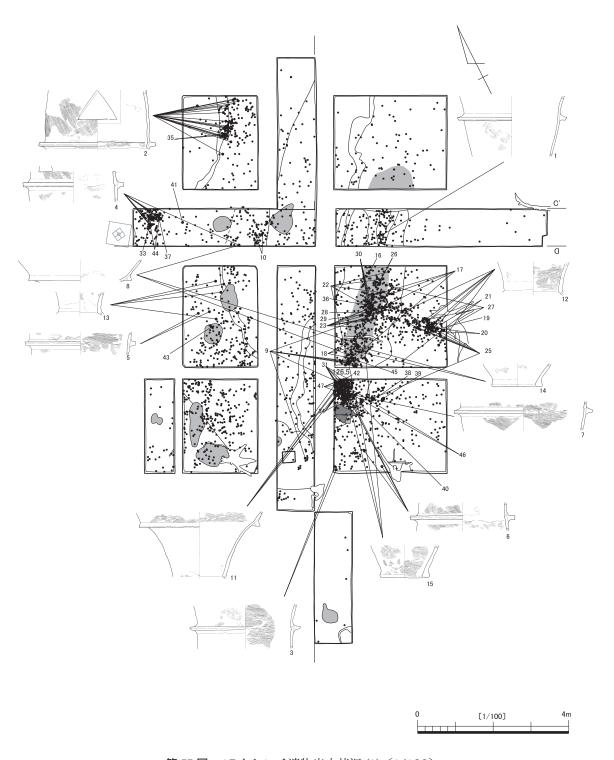
第 54 図 17 トレンチ平面図(陥没坑確認段階)〔1/100〕



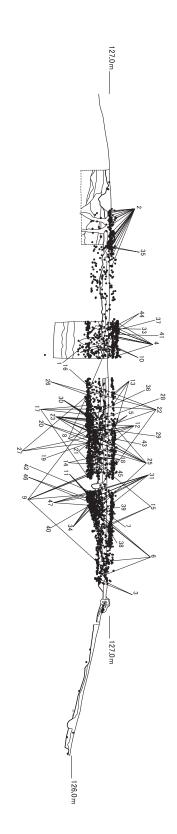
第 55 図 17 トレンチ平面図 (盛土断ち割り段階) ・断面図 [1/100]



第56図 17トレンチ断面図〔1/00〕



第57図 17トレンチ遺物出土状況 (1) [1/100]



対し地形補正処理をおこなった。

後円部平坦面における地下レーダー記録では、深度 1m 程度までの情報が得られている。そこで、上部から掘り込む形の埋葬施設を想定して、浅い部分の地層の変化に着目して記録の判読を行った。判読にあたっては、反射面の連続性を検討し、反射面の途切れや落ち込み状の形状、局所的な反射像といった箇所を抽出した。

判読の結果、反応箇所を平面図(第53図上段)に示した。 乱れた反射の分布範囲は墳頂部の南東側に集中する傾向があり、このうち特に明瞭な乱れた反射範囲は墳頂部の中央やや南よりに東西方向に分布しており、この範囲が最も埋葬主体部の可能性が高いと判断された。また、地表付近からの強い反射範囲は2箇所見られ、東側はトレンチ跡、南側は最近の掘削跡と判断された。

さらに地形補正したプロファイル記録を用いて、タイムスライス解析をおこなった。

タイムスライス解析結果の平面図(第 53 図下段)を示す。 解析は 10cm ごとにおこなったが、ここで示した平面図は、標高 126.5m を中心として 15cm 幅の反射強度(最大)をとったものである。図では、反射強度が大きい場合は赤色系、小さい場合は青色系で表示した。反射強度が大きい赤色の範囲が右半分に強く出ているのは、地表面からの反射をとっているためである。したがって、解釈する際には、この地表面からの強い反射よりも下で出てくる反射強度の大きい箇所に着目することになる。

タイムスライス解析の結果、特に着目されるのは、標高 $126.5 \sim 126.6 \text{m}$ の $X=5 \sim 7 \text{m}$ 、 $Y=2 \sim 5 \text{m}$ 付近に顕著に見られる明瞭な反射体の集中範囲①である。この範囲は、プロファイル記録から埋葬主体部の可能性があると指摘した範囲とほぼ同じ位置にあたる。さらに、タイムスライス解析では、標高 $126.4 \sim 126.5 \text{m}$ の $X=5 \sim 8 \text{m}$ 、 $Y=6 \sim 10 \text{m}$ 付近に、①よりは弱いものの反射体の集中範囲②が見られる。この範囲は、プロファイル記録では反応箇所として指摘していないが、タイムスライス解析で指摘された箇所であり、①よりも可能性は低いものの埋葬主体部の可能性が考えられる。

なお、標高 $126.2\sim126.4$ m の X=9m、Y=3m 付近、標高 $126.2\sim126.3$ m の $X=10\sim12$ m、 $Y=6\sim8$ m 付近に見られ

る顕著な反射体は、プロファイル記録からそれぞれ"最近の掘削跡"、"トレンチ跡"と指摘した箇所に対応している。

プロファイル記録からの解釈結果とタイムスライス解析結果とを重ね合わせたものを第53図下段に示す。

第1号墳において、埋葬主体部の可能性のある箇所は以下の2箇所である。

- ①墳頂部中央やや南寄りに東西方向に分布
- ②墳頂部中央やや北寄りに南北方向に分布

埋葬主体部の可能性のある上記2箇所は、反射パターンから判断すると、石室や石郭のような石材を用いた形式である可能性は低く、粘土郭や木棺直葬などの埋葬形式であると考えられる。また、発掘調査では、第1号墳の後円部墳頂部縁辺で埴輪列の痕跡が確認されているが、今回の探査結果では明瞭に埴輪列の痕跡と指摘できる反応はなかった。

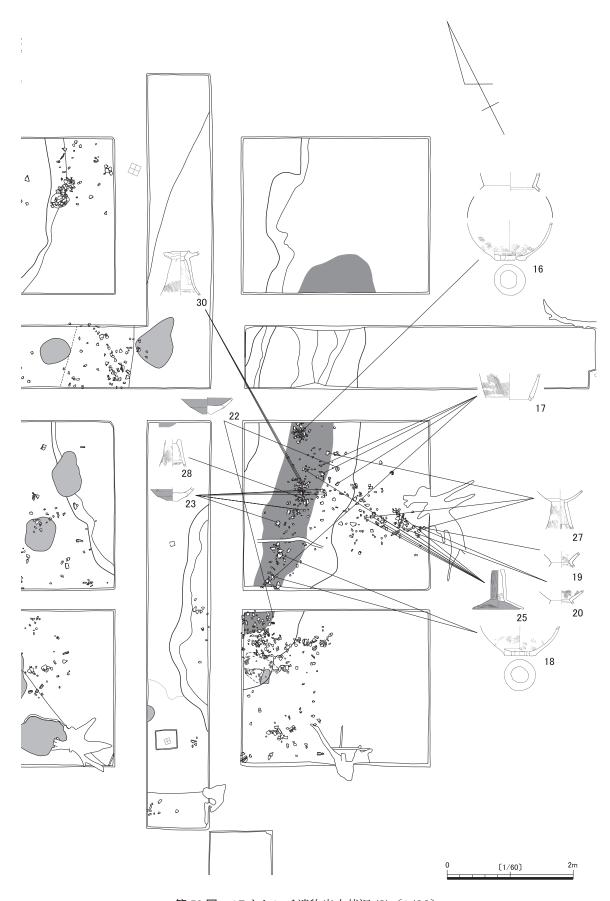
以上のように、地下レーダー探査の結果では、埋葬施設の可能性が2箇所指摘されているが、明確なプランとして捉えるには至らなかった。調査に当たっては、上記結果を参考に慎重に行うこととした。なお、埋葬主体部の調査については、本調査が史跡の保存整備を目的としたものであるという性格から、内部の調査までは行わず、埋葬施設の位置、基数の確認に留めた。

調査区は、想定主軸線上及びこれに直交する中心線上に設定した幅 2m のトレンチを軸に、ベルトを残しながら面的に設定した。調査区南側は一部隆起斜道部に延長しているが、これは後円部墳頂部縁辺で発見された埴輪列の隆起斜道部における配列状況を確認するために設定したものである。調査面積は 73.1 ㎡である。

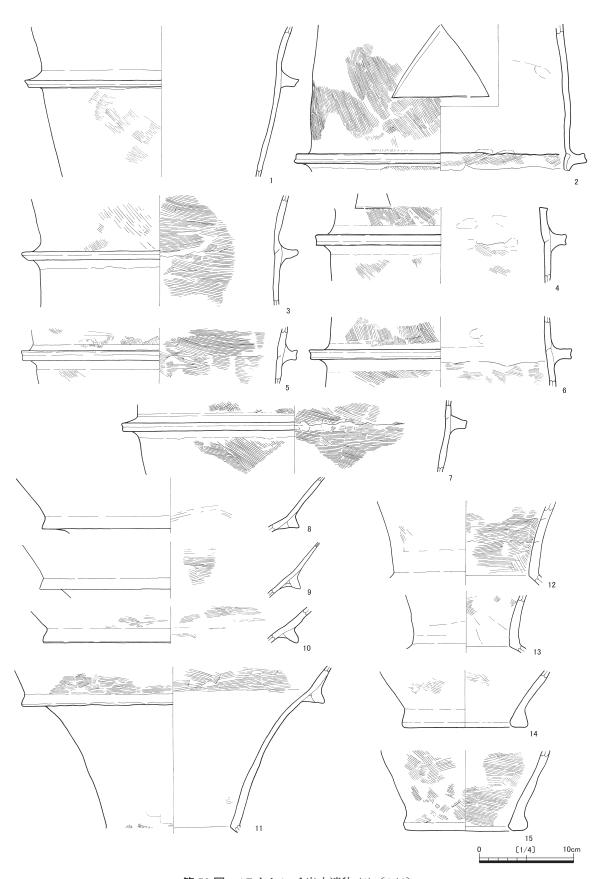
調査前の後円部墳頂部における現況は、古墳発見の契機となった平成11年の携帯電話基地局建設工事に伴う事前の樹木伐採により、平坦面全体を見渡せる状況にあった。墳頂部西端には葉山町一級基準点(現在は廃点)が打設してあり、第1号墳における最高所(127.365m)を測るが、西側に比べて東側が低くなっていることが目視でも観察できる状況にあった。その比高差は60cmほどもあることが確認されたが、築造当初の姿なのか、後世の改変によるものなのか調査によって明らかにされることが望まれた。

地表面から墳丘面までは $10 \sim 20$ cm程度のわずかな土層の堆積しか認められず、表土層(1 層)及び灰 黄褐色土(2 層)を除去すると、土丹ブロックを多量に含む墳丘盛土が平坦面全体に広がり、墳丘面をなしていることが確認された。墳丘面は調査前の現況地形と同様西から東に向って傾斜しており、とくに想定主軸線付近では段差をもって下がる状況が顕著であったため、後世の改変を受けている可能性も考えられたが、後円部平坦面の東西縁辺部にあたる 1 トレンチ、3 トレンチのいずれからも埴輪列の存在が確認されていることから、後述する墳丘の断ち割り調査を実施するまでは結論を得ることはできなかった。

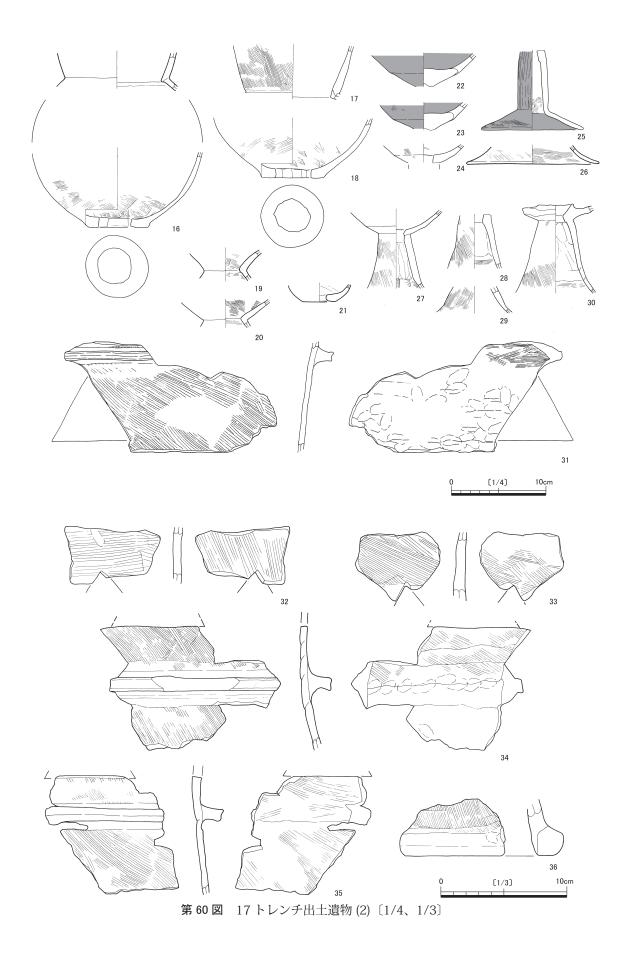
想定主軸線からやや東側の位置で、主軸を $15\sim16^\circ$ 東に向けて、幅約 1.6m 長さ約 7m をはかる、黒色土層($3\sim7$ 層)が堆積する長楕円形のプランが確認された。プラン内の黒色土の堆積状況をみると、断面 V 字状に落ち込む状況が確認され、その位置、規模等を勘案すると第 1 号墳の埋葬施設の陥没坑であると判断された。なお、陥没坑の南端の覆土上層からは、径 $40\sim60$ cm程度の広がりをもって焚き火跡と思われる炭化材の集中箇所を確認している。焼土は認められず、層位的にも陥没坑覆土上面にあるため、少なくとも埋葬施設陥没後のものと考えられたが、時期を特定するにはいたらなかった。幸い良好な状態で炭化材が遺存していたため、サンプルを採取し放射性炭素年代測定を実施した。結果としては江戸〜昭和時代以



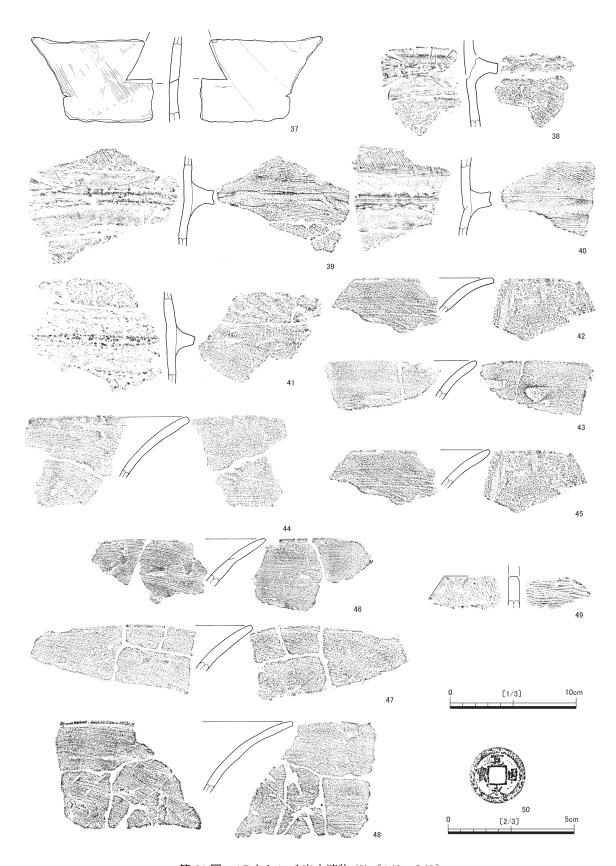
第 58 図 17 トレンチ遺物出土状況 (2) 〔1/60〕



第59図 17トレンチ出土遺物(1) [1/4]



79



第61図 17トレンチ出土遺物(3) [1/3、2/3]

降であることが分かり、古墳とは関連性のないものであることが明らかとなっている。

さらに埋葬施設の構造及び墳丘の構築状況を確認するために、想定主軸線に直交し、中心線を通る横断ラインと、北側の一部で墳丘盛土の断ち割り調査を実施した。盛土は全体に非常にしまりが強く、逗子層土丹ブロックを多量に含むが、その粗密、大きさ、黒色土の割合を違えながら層をなして、約 1.6m 積み上げられている。下層は比較的黒色土主体の層と逗子層主体の黄褐色土層が互層をなす傾向があるが、上層から墳丘面まで土丹ブロックを多く含む暗褐色土層が積み上げられていた。

盛土直下からは旧地表に相当する黒色土層が確認されている。この旧地表を追っていくと、階段状のズレが存在することを確認した。階段状のズレには下に向って間隙を有するところもあり、このズレに沿って土層の断面を精査すると、西から東に向って 70°程の傾斜をもった亀裂が墳丘面まで達していることが確認された。以上のような痕跡から、この階段状のズレは地すべりに起因するものであると判断した。旧地表の東西両端の比高差を測ると、約60㎝東側が低くなっていることから、墳丘面が傾斜している理由もこの地すべりによるものであることが明らかとなった。この地すべりが発生した時期については、陥没坑堆積土にも亀裂が認められることから、墳丘築造後しばらく経過したのちに発生したものと考えられる。

陥没坑直下、地表から約 1.0m の深さの盛土中から、粘土槨と考えられる被覆粘土の一部を確認した。被覆粘土の中央部分は陥没して墓坑埋土が落ち込んでおり、この陥没部分が腐朽した木棺の位置に相当する。被覆粘土は鉄分を多く含むため赤褐色を呈しており、粘土槨の幅は内法で約 1.3m(外法で約 1.8m)をはかる。また、東側の粘土の外側にはにぶい黄褐色の粘土が 50 cmの幅で薄く広がっているが、被覆粘土とは色調が異なり、盛土層の一部の可能性がある。なお、粘土槨も上述の地滑りの影響を受けており、西側に比べて東側が 40 cmほど下がっている。粘土槨周辺は掘削せず残しているため、詳細は分からないが、旧地表面のレベルとの比較から、棺床は旧地表面あるいは一部掘り下げた程度の位置にあると考えられる。

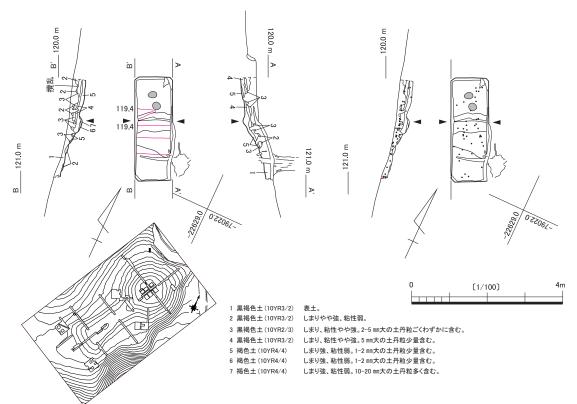
埋葬施設は調査した範囲内では粘土槨 1 基のみであった。なお、盛土は平面的に掘り下げながら、随時 墓壙プランの確認につとめたが、狭小な範囲での調査のため上面ではプランを捉えることができず、結果的 に粘土槨が発見された後、断面観察を行った結果、東西幅で上端約 7m、下端約 4.6m の断面すり鉢状を呈 する墓坑を確認した。

出土遺物 (第59~61 図、図版28~32)

遺物は、総計3048点出土している。墳丘面上及び陥没坑内の覆土中からは、多量の埴輪片が出土している。いくつかの集中箇所をもって出土してはいるものの、原位置を保った状態で出土しているものはなく、いずれも縁辺部に置かれた埴輪列が倒壊し、流入したものと推定される。

さらに陥没坑の西側から覆土に流れ込むように、高坏、器台、焼成前の底部穿孔壺などが複数個体出土している。埴輪は調査区の広範囲にわたって出土しているものの、土器は当該エリアに限定されて出土していることから、当初土器類は埋葬施設脇に配置され、陥没後、倒壊し破片となった埴輪類とともに流れ込んだものと想定される。なお、陥没坑覆土下層は、一部を除いて掘り下げを行わず、現状保存とした。

 $1\sim7$ 、 $31\sim41$ は円筒埴輪である。2、4、 $31\sim35$ 、37 は三角形の透かし孔の一部が確認されている。 36 は円筒埴輪基部破片である。 $8\sim15$ は壺形埴輪である。 $8\sim11$ は口縁部で、いずれも粘土帯を貼り付けた後、断面三角形状の粘土を下から充填し指で押さえる共通の方法で製作されている。12、13 は頸部破片である。14、15 はいずれも開口底部である。 $42\sim47$ は埴輪口縁部破片である。 $16\sim30$ は陥没坑西脇から出土した土器である。 $16\sim18$ は中型壺である。いずれも陥没坑内覆土から出土している。16、18 は



第62図 18トレンチ平面図・断面図、遺物出土状況〔1/100〕

焼成前の底部穿孔壺で、一旦そこを製作した後、ヘラを用いて切り取っている。両個体は形態、法量、製作技法が非常によく似ている。 $19 \sim 21$ は小型壺である。19、20 は小型壺の頸部と考えられるが、器台の可能性もある。21 は底部で、中央に焼成前穿孔が施されている。 $22 \sim 29$ は高坏である。 $22 \sim 24$ は坏部である。24 のみ中央に焼成前穿孔である。25 はいわゆる柱状脚の高坏である。27、28 はハの字状に開く高坏である。28 即部は短めで、ハケを残すなど 25 に比べるとやや粗製である。20 は異形の器台で、器受部に返しを作り出している。29 は表土中から出土した寛永通宝である。

18トレンチ (第62 図、図版20)

18トレンチは、後円部墳丘北側の墳裾を確認するために平成21年度(第6次調査)に設定した調査区である。調査区は、後円部の墳丘形態を確定するため、これまでの調査結果と地形から、長さ2.8m、幅1m、調査面積は2.8 m²と狭小な範囲で墳裾の位置を狙って設定したものである。

調査前の現況からも、散策路となっている平坦地から墳丘へと傾斜が変わることが確認することができた。調査地点には散策路に伴い設置された木製のベンチが存在し、地表には周囲の樹木の根が密に張っている状況であった。

表土層(1 層)を除去すると、黒褐色土($2 \sim 4$ 層)の堆積がわずかに確認され、墳裾から平坦面にかけて初期流入土である褐色土($6 \sim 7$ 層)が堆積していた。

墳丘は、標高約 119.4m を墳裾とし、基盤層である逗子層まで削り出して構築している。とくに墳裾は、幅 30 cm程、深さは平坦面から 6 \sim 10 cm程度溝状に掘り込んでおり、墳丘と平坦面を画している。

出土遺物

遺物は表土層から黒褐色土を中心に埴輪小片が出土しており、いずれも流れ込んだものと考えられる。遺物は 40 点取り上げたが、全体に小片が多く図示できるものはなかった。

出土遺物観察表

第4表 1トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存	調整その他の特徴	色調	胎土	備考
第12図1	円筒埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 ナナメハケ (10 本 / cm) →突 帯ヨコナデ、□縁部ヨコナデ 内面 ヨコハケ (7 条 / cm) →□縁部 ヨコナデ	橙色	白色粒子やや多 く含む。	
第 12 図 2	円筒埴輪	-	-	-	底部破片	外面 タテハケ→粘土帯折返し 内面 ナデ	外 黒褐色 内 明赤褐色	白色粒子やや多 く含む。	

第5表 2トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	房 3 衣 残存		トレンナ田工退物観祭 の他の特徴	色調	胎土	備考
第 17 図 1	円筒埴輪	-	-	(47.0)	胴部 1/2、 口縁部欠	外面内面	タテハケ 9 本 / cm、突帯ヨコナ デ 輪積み上にユビオサエ、ナデ。	明赤褐色	自色粒子少量含 む。	外面器面磨滅
第 17 図 2	円筒埴輪			(10.6)	胴部 3/5	外面	楽帯裏にナナメハケ (8本/cm) タテハケ (9本/cm) → 突帯ヨ	黄褐色	白色粒子、黒色	
第17 凶 Z	门间担粣	-	-	(19.6)		内面	コナデ	與傾巴	粒子少量含む。	
第17図3	円筒埴輪	-	-	-	胴部 1/2	透孔外面	△ (?) 底辺一辺 下段ヨコハケ (9 本 / cm) →突帯	外明黄褐色	白色粒子少量含	
						内面 透孔	貼付、ヨコナデ→上段ナナメハケ (9 本 / cm) ナナメハケ (10 本 / cm)、ナデ △底辺一辺残存	内 褐色	む 。	
第 17 図 4	円筒埴輪	-	-	-	胴部 1/2	外面内面	ナナメハケ (9本/cm)、 突帯 ヨコナデ ヨコハケ (9本/cm)	明赤褐色	自色粒子少量含 む。	
第 17 図 5	円筒埴輪		(21.0)	(17.3)	底部 1/4	外面内面	基部ユビオサエ→ナデ、胴部ナナメハケ (8本/cm)ナデ	外 明黄褐色 内 橙色	白色粒子少量含む。	
第17図6	円筒埴輪	-	-	-	突带破片	外面 内面	突帯ヨコナデ ナナメハケ(10本/cm)	外 明赤褐色 内 橙色	自色粒子やや多 く含む。	
第17図7	円筒埴輪	-	-	-	突带破片	外面内面	突帯ヨコナデ→上段ナナメハケ (11 本 / cm) ヨコハケ	外 にぶい黄橙色 内 橙色	白色粒子少量含 む。	
第17図8	円筒埴輪	-	(41.0)	(16.8)	底部 1/5	外面 内面	タテハケ (10 本 / cm) 輪積み痕、指頭痕顕著、ナデ	明黄褐色	自色粒子やや多 く含む。	
第 18 図 9	壺形埴輪	39.8	-	(20.5)	口頸部	外面	頸部ナデ→粘土紐貼付後下半に 粘土充填ユビオサエ→口縁部ヨ コハケ (10 本/m)→ヨコナ デ	褐色	白色粒子、黒色 粒子少量含む。	
						内面	頸部下半ナナメハケ (5 本 / cm) →ナデ、口縁部ヨコハケ (8 本 / cm) →ヨコナデ			
第 18 図 10	埴輪	(35.9)	-	(5.7)	口縁部破片	外面内面	ナナメハケ (11 本 / cm) →ヨコ ナデ ナナメハケ (11 本 / cm)	にぶい赤褐色	自色粒子少量含む。	
第 18 図 11	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面 内面 透孔	ナナメハケ (10 本 / cm) 、 突帯 ヨコナデ ナナメハケ (5 本 / cm) 、ナデ △ (?) 底辺一辺	外 明黄褐色 内 明褐色	白色粒子少量含 む。	
第 18 図 12	円筒埴輪	-	-	-	胴部破片	外面内面	ナナメハケ (7 本 / cm)、突帯ヨ コナデ ナナメハケ (5 本 / cm) →ナデ	外 にぶい赤褐色 内 明赤褐色	白色粒子やや多 く含む。	
第 18 図 13	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面内面	ナナメハケ (10本/cm) ヨコハケ (10本/cm)	明赤褐色	自色粒子少量含む。	
第 18 図 14	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面内面	タテハケ (10 本 / cm) → 突帯ヨ コナデ 突帯裏ヨコハケ (9 本 / cm)、ナ	明褐色	白色粒子やや多く含む。	
第 18 図 15	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面 内面	ナナメハケ (8 本 / cm) ヨコハケ (9 本 / cm)	にぶい褐色	白色粒子、黒色 粒子少量含む。	
第 18 図 16	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面内面	ナナメハケ (8本/cm)、突帯ヨ コナデ ナナメハケ (8本/cm) →ナデ	明褐色	自色粒子やや多 く含む。	
第 18 図 17	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面内面	突帯ヨコナデ ヨコハケ (10 本 / cm)	橙色	自色粒子少量含 む。	
第 19 図 18	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面内面	器面摩滅 ナデ、指頭痕	明褐色	白色粒子少量含む。	
第 19 図 19	埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 内面	ヨコハケ (10本/cm) ヨコハケ (10本/cm)	橙色	黒色粒子少量含 む。	
第 19 図 20	壺形埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 内面	ヨコハケ (10本/cm) ヨコハケ (5本/cm)	外 にぶい褐色 内 橙色	白色粒子少量含 む。	

第6表 3トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存	調整で	その他の特徴	色調	胎土	備考
第21図1	壺形埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面	ナナメハケ (8 本 / cm) →有段 部ヨコナデ	明黄褐色		
						内面	ヨコハケ (10 本 / cm)			

第7表 5トレンチ出土遺物観察表

	I (om)		高さ	残存	, C	一の他の特徴	色調	胎土	備考
ロコかたエキキへ	(cm)	(cm)	(cm)	1 2 rn 3-	hl	TG1. b = 1, L (0 -L /) -d-14	bl 注码5万	占な性マロロク	
円筒埴輪	-	36.0	(46.3)	1条二段ま で残存	外面	下段タテハケ (9 本 / cm)、突帯 ヨコナデ、上段タテハケ (9 本 / cm)、ナデ	外 浅橙色 内 橙色	白色粒子やや多 く、黒色粒子少 量含む。	
					内面	下段ナナメハケ (10 本 / cm)、		重日9。	
					透孔				
円筒埴輪	-	-	-	胴部	外面 内面	器面摩滅 器面磨滅、ユビオサエ	橙色	自色粒子やや多 く含む。	
円筒埴輪	-	-	-	胴部	外面	器面磨滅	外褐色	自色粒子、赤色	
						合部ヨコハケ (9 本 / cm) 下段△3孔、上段△2孔	内 恒巴	松丁少里百む。	
円筒埴輪	-	-	(16.5)	胴部 1/3	外面		にぶい褐色	白色粒子やや多く単色粒子小	
					-t	ケ (11 本/cm)		量含む。	
円筒埴輪	-	-	-	胴部 1/4			にぶい赤褐色	白色粒子やや多	
					内面	ナデ		く含む。	
円筒埴輪	-	-	(5.6)	胴部 1/3			橙色	白色粒子やや多 く含む。 	
円筒埴輪	(33.5)	-	(17.0)	口縁部	外面		明赤褐色	白色粒子やや多	
					内面			量含む。	
円筒埴輪	-	-	-	突帯最上	外面		外赤褐色	白色粒子やや多	
					内面		内 恒邑		
円筒埴輪	-	-	(26.3)	胴部	外面		にぶい赤褐色	白色粒子やや多く単色粒子小	
					+=	ハケ (10本/cm)		量含む。	
						(9 本 / cm)			
					透孔				
円筒埴輪	-	-	(5.0)	突帯 1/3	外面 内面	器面磨滅	明赤褐色	自色粒子やや多 く含む。	
円筒埴輪	-	-	-	突帯 1/5		ナナメハケ (5 本 / cm) → 突帯	外にぶい褐色	白色粒子やや多	
					内面		内 恒円	(音む。	
円筒埴輪	-	-	(9.3)	突帯	外面		外明赤褐色	白色粒子やや多	
					内面	下半ナデ、上半ヨコハケ(7本	内 恒邑	740.	
売形値輪	33.0		(187)	口頭部	从而	· · ·	松 伍	白色粒子小量含	
5点/// 4日十冊	00.0		(10.7)	ПРЖПР		部ヨコナデ	15.0	む。	
売形埴輪	(33.3)	-	(5.3)	□縁部 1/4	-	ヨコハケ (8 本 / cm)	橙色	白色粒子やや多	
	(,		()		内面			く含む。	
虹 / 地 「	-	-	-		内外匪	11 磨滅	明亦褐巴	日色粒子少量含 む。	
壺形埴輪	-	-	(20.9)	口頸部	内外面	可磨滅	明黄褐色	自色粒子少量含む。	
壺形埴輪	-	-	(5.3)	口縁部	内面	ヨコハケ (10本/cm)		自色粒子やや多 く含む。	
壺形埴輪	-			胴部下半全 周			外 橙色 内 赤褐色	自色粒子少量、 黒色粒子やや多	
書形は歩		12.0	(20.0)	阳动灯 1 / 4	hl ===	下半十十ノハケ (「ナノー」	₩.G.	く含む。	
弘が担押	-	13.0	(20.6)	底部ほぼ全		r+//メハケ (3 本/cm)、 中位ナナメハケ (11 本/cm)	但也	日巴松ナツ軍百	
毒形植岭			(26.5)	周部全国	内面	ヨコハケ (6本/cm)	にでい格布	白布粉之小县	
5記月ン4世界冊	-	-	(20.3)	所部主用、 底部欠損			16人の人、1四日	黒色粒子少量含	
盆	_		_	底部全周	内外電	前磨滅	にぶい苗榕色	+	底部凹み
≥T*				/ACAPT/HI	1777	11 /ACT 11 /AC	にない。対は口	赤色粒子少量含	MACHINE OF
	門門	円筒埴輪 - 西部形埴輪 - 直部形埴輪 - 直部形埴輪 - 直部形埴輪 - 直部形埴輪 - 直部形埴輪 - 直部形埴輪 - 直形埴輪 - 直形埴輪 - 直形埴輪 - 直形埴輪 - 直形埴輪 - 直形 坂崎 -	円筒埴輪	円筒埴輪 (16.5) 円筒埴輪 (16.5) 円筒埴輪 (5.6) 円筒埴輪 (33.5) - (17.0) 円筒埴輪 (26.3) 円筒埴輪 (5.0) 円筒埴輪 (5.0) 円筒埴輪 (5.3) 壺形埴輪 (20.9) 壺形埴輪 (20.9) 壺形埴輪 (5.3) 壺形埴輪 (20.9) 壺形埴輪 (20.6) 壺形埴輪 (20.6)	円筒埴輪 (16.5) 胴部 1/3 円筒埴輪 (16.5) 胴部 1/3 円筒埴輪 原部 1/4 円筒埴輪 (5.6) 胴部 1/3 円筒埴輪 (26.3) 胴部 円筒埴輪 (26.3) 胴部 円筒埴輪 (5.0) 突帯 1/3 円筒埴輪 (9.3) 突帯 壺形埴輪 33.0 - (18.7) 口頸部 壺形埴輪 (20.9) 口頸部 壺形埴輪 (20.9) 口頸部 壺形埴輪 (5.3) 口縁部 虚形埴輪 (5.3) 口縁部 虚形埴輪 (20.9) 口頸部 壺形埴輪 (5.3) 口縁部 虚形埴輪 (5.3) 口縁部	一円筒埴輪	四高埴輪 同部 四高 下段ナナメハケ (10 本/cm) 上段タテュピナデ 透孔 △3 孔 上段公 一	内面 下段ナナメハケ (10 本 / cm) 、 上	内面 下段ナナメハケ (10 木 / m) 上段タラコピナテ 投色 白色粒子やや多く含む。 内面 粉面 粉面 器面酵源、ユピオサエ 投色 白色粒子・本色 内面 器面酵源、ユピオサエ 内面 器面酵源、ユピオサエ 内面 器面酵源、ユピオサエ 内 根色 白色粒子、赤色 白色粒子、赤色 白色粒子、赤色 白色粒子、赤色 白色粒子・本色 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大

第31図22	円筒埴輪	-	-	-	突帯		ヨコナデ	橙色	白色粒子少量含 む。	23 と同一個体 か?
						内面	下半ナデ、ナナメハケ(6本/cm)			
第 31 図 23	円筒埴輪	-	-	-	突帯	ヨコナ		橙色	白色粒子少量含 む。	22 と同一個体 か?
第31図24	円筒埴輪	-	-	-	突带	外面 内面	突帯ヨコナデ 器面磨滅	黄橙色	自色粒子多く含 む。	
第31図25	円筒埴輪	-	-	1	突帯	外面内面	タテハケ (8 本 / cm) →突帯ヨコ ナデ 指頭痕	橙色	白色粒子少量、 黒色粒子少量含 む。	
第31図26	円筒埴輪	-	-	-	胴部		器面磨滅 輪積み上にユビオサエ、上部に ヨコハケ (9 本 / cm) △ (?) 底辺	外 明赤褐色 内 橙色	白色粒子やや多 く、赤色粒子少 量含む。	
第31図27	円筒埴輪	-	-	1	突帯破片	内面	ナナメハケ (10 本 / cm)、突帯 ヨコナデ ヨコハケ (10 本 / cm) △左辺一辺	外 橙色 内 にぶい黄橙色	白色粒子少量含 む。	
第31図28	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面 内面 透孔	器面磨滅 ヨコハケ (9 本 / cm) △底辺一辺	明褐色	白色粒子やや多 く含む。	26 と同一個体 か?
第31図29	壺	-	-	-	口縁部破片		タテヘラミガキ ナナメハケ (7 本 / cm)	黄橙色	黒色粒子多量、 赤色粒子少量含 む。	

第8表 6トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存	調整その他の特徴	色調	胎土	備考
第 34 図 1	円筒埴輪	-	-	(8.6)	突帯	外面 ナナメハケ (11 本/cm) 内面 ヨコハケ (10 本/cm)	橙色		突帯裏にヨコ ハケ
第 34 図 2	円筒埴輪	-	-	(8.2)	突帯	内外面磨滅	赤褐色	自色粒子やや多 く含む	
第34図3	円筒埴輪	-	-	-	突帯	外面 ナナメハケ (8 本 / cm) →突帯 ヨコナデ 内面 ナナメハケ (8 本 / cm)	橙色	白色粒子やや多 く含む。	
第34図4	壺形埴輪	-	-	-	口縁部	外面 ナナメハケ (9本/cm) →口唇 部ヨコハケ (11本/cm) 内面 ヨコハケ (10本/cm)	橙色	黒色粒子、白色 粒子少量含む。	

第9表 7トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存	調整その他の特徴	色調	胎土	備考
第 36 図 1	円筒埴輪	-	-	-	胴部破片	外面 ナナメハケ (12 本 / cm) →突 帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ (12 本 / cm) 透孔 △ (?) 底辺一辺	明黄褐色	白色粒子少量含む。	
第 36 図 2	円筒埴輪	-	-	-	胴部破片	外面 ナナメハケ (9 本 / cm) 内面 ナナメハケ (10 本 / cm) 透孔 △左辺一辺	橙色	自色粒子少量含 む。	
第 36 図 3	壺形埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 ナナメハケ (9本/cm) 内面 ナナメハケ (8本/cm)	明褐色	自色粒子少量含 む。	
第 36 図 4	壺形埴輪	-	-	-	口縁部破片	内外面 ヨコナデ	橙色	自色粒子やや多 く含む。	
第 36 図 5	壺形埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 ナナメハケ (9本/cm) 内面 ヨコナデ	明褐色	自色粒子少量含 む。	
第36図6	壺形埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 ナナメハケ (6本/cm) 内面 ヨコハケ (8~9本/cm) →ヨ コナデ	赤褐色	自色粒子少量含む。	
第 36 図 7	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面 タテハケ (10本/cm) →ヨコ ハケ (10本/cm) 内面 ヨコハケ (9本/cm)	明赤褐色	自色粒子少量、 黒色粒子わずか に含む。	
第 36 図 8	円筒埴輪	-	-	-	突带破片	外面 ナナメハケ (10本/cm) 内面 下半ヨコハケ (9本/cm)、上 半ナデ	赤褐色	自色粒子やや多 く含む。	
第 36 図 9	円筒埴輪	-	-	-	胴部破片	外面 ナナメハケ (8~9本/cm)、	橙色	白色粒子少量含む。	

第10表 8トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存	調整その他の特徴	色調	胎土	備考
第39図1	円筒埴輪	-	-	(5.9)	突帯 1/4	外面 ナナメハケ (10 本 / cm) 内面 ヨコハケ (10 本 / cm) 透孔 △ (?) 底辺一辺		白色粒子少量、 黒色粒子少量含 む。	

第 39 図 2	壺形埴輪	-	-	(7.1)	段部 1/5	外面 内面	ヨコハケ (10本/cm) ヨコハケ (9本/cm)	橙色	自色粒子少量含 む。	
第 39 図 3	円筒埴輪	-	-	(4.5)	突帯	外面 内面	器面磨滅 ヨコハケ(本数不明)→ナデ	橙色	白色粒子少量含 む。	
第 39 図 4	壺形埴輪	-	(16.2)	(8.1)	底部 1/2	外面 内面	タテハケ (6本/cm) ナナメハケ (6本/cm)	橙色	白色粒子やや多 く、黒色粒子少 量含む。	胎土分析葉山 ⑥
第 39 図 5	壺形埴輪	-	(10.6)	(5.6)	底部	外面 内面	器面磨滅 ヨコハケ (5 本 / cm)	橙色	白色粒子少量、 赤色粒子少量含 む。	
第 39 図 6	円筒埴輪	-	-	-	突带破片	外面 内面	器面磨滅 ヨコハケ (10本/cm)	橙色	自色粒子少量含 む。	
第 39 図 7	円筒埴輪	-	-	-	底部破片	外面 内面	タテハケ (9 本 / cm) ナデ	橙色	自色粒子やや多 く、黒色粒子や や多く含む。	
第 39 図 8	壺形埴輪	-	-	-	口縁部片	器面磨	雪滅	外 黄橙色 内 橙色	白色粒子少量、 赤色粒子少量含 む。	

第11表 9トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存	調整で	一の他の特徴	色調	胎土	備考
第 43 図 1	円筒埴輪	-	-	(6.7)	突帯 1/6	外面内面	下段ナナメハケ (8 本 / cm) →突 帯ヨコナデ→上段タテハケ (9 本 / cm) ナデ		白色粒子やや多 く含む。	
第 43 図 2	円筒埴輪	-	-	(3.7)	突帯	外面 内面	突帯ヨコナデ ヨコハケ (10 本 / cm)、突帯裏 面ナナメハケ (8 ~ 9 本 / cm)	橙色	白色粒子わずか に含む。	
第 43 図 3	円筒埴輪	-	-	-	突帯	外面 内面	突帯ヨコナデ ヨコハケ (8 本 / cm)	にぶい橙色	自色粒子やや多 く含む。	
第 43 図 4	埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 内面	ヨコハケ (8 本 / cm) ナナメハケ (8 本 / cm)	明黄褐色	黒色粒子少量含 む。	

第12表 15トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存	調整で	の他の特徴	色調	胎土	備考
第 52 図 1	円筒埴輪	-	-	(8.7)	胴部 1/8	外面 内面	器面磨滅 ナナメハケ (9 本 / cm) 、	にぶい褐色	白色粒子やや多 く、赤色粒子少 量含む。	
第 52 図 2	壺形埴輪	-	(11.2)	(9.7)	底部	外面 内面	ナナメハケ (5 本 / cm) ナナメハケ (5 本 / cm)	明黄褐色	白色粒子少量、 黒色粒子少量含 む。	底部開口
第 52 図 3	壺形埴輪	-	11.8	(5.0)	底部	外面 内面	ナナメハケ (7 本 / cm)、底部付 近に指頭痕 ナナメハケ (5 本 / cm)	外 にぶい黄橙色 内 橙色	白色粒子やや多 く、黒色粒子少 量含む。	底部開口
第 52 図 4	埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 内面 透孔	ナナメハケ (9 本 / cm) ヨコナデ→□縁部ヨコナデ △左辺一辺	橙色	白色粒子やや多 く含む。	
第 52 図 5	埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 内面	タテハケ (7 本 / cm) →後円部 ヨコハケ (8 本 / cm) 器面剥離	橙色	白色粒子少量含 む。	
第 52 図 6	埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 内面	ナナメハケ (10本/cm) 器面磨滅	外 にぶい黄橙色 内 褐灰色	自色粒子やや多 く含む。	
第 52 図 7	壺形埴輪	-	-	-	口縁部破片	外面 内面	ナデ ヨコハケ (下半5本/cm、上半 8本/cm)	橙色	白色粒子少量、 黒色粒子わずか に含む。	
第 52 図 8	円筒埴輪	-	-	-	突帯破片	外面 内面 透孔	ナナメハケ (10 本 / cm)、突帯 ヨコナデ ナデ 下段△右辺一辺、上段△二辺	明黄褐色	白色粒子やや多 く含む。	

第13表 17トレンチ出土遺物観察表

図版No.	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存	調整その他の特徴	色調	胎土	備考
第 59 図 1	円筒埴輪	-	-	-	突帯 1/4	外面 ナナメハケ(10本/cm)、器 面磨滅 内面 器面磨滅	明赤褐色	白色粒子少量含 む。	
第 59 図 2	円筒埴輪	-	-	(15.4)	胴部	外面 ナナメハケ (8 本 / cm) 内面 ナデ、突帯裏面にナナメハケ (10 ~ 11 本 / cm) 透孔 △二辺	黄褐色	白色粒子少量、 黒色粒子少量含 む。	突帯上 5.5 cm に透孔
第 59 図 3	円筒埴輪	-	-	(11.6)	突帯 1/7	外面 ナナメハケ (4 本 / cm) 内面 ヨコハケ (8 本 / cm)	外 明褐色 内 黄橙色	白色粒子少量含 む。	
第 59 図 4	円筒埴輪	-	-	(7.9)	突帯 1/2	外面 ナナメハケ (9 本 / cm) 内面 ヨコハケ (10 本 / cm) 透孔 △ (?) 底辺一辺	黄橙色	白色粒子少量、 黒色粒子少量含 む。	突帯上 2.5 cm に透孔

									,	
第 59 図 5	円筒埴輪	-	-	(5.9)	突帯 1/5	ヨコナ	ナナメハケ (10 本 / cm) →突帯 デ ヨコハケ (9 本 / cm)	外 橙色 内 明褐色	白色粒子、黒色 粒子少量含む。	
第 59 図 6	円筒埴輪	-	-	(7.3)	突帯 1/2		ナナメハケ (10本/cm) ヨコハケ (11本/cm)	外 にぶい黄褐色 内 明褐色	白色粒子やや多 く、黒色粒子少 量含む。	
第 59 図 7	円筒埴輪	-	-	(7.6)	突帯 1/6	→ 突 指 ナメ <i>ı</i>	下段ナナメハケ (10 本 / cm) 貼付、ヨ コナデ→上段ナ ^ケ (9 本 / cm) ヨコハケ (10 本 / cm)	橙色	白色粒子、黒色粒子少量含む。	
第 59 図 8	壺形埴輪	-	-	(5.9)	段部 1/4	外面	器面磨滅 ヨコハケ (8本/cm)、器面磨	にぶい褐色	白色粒子やや多 く含む。	
第 59 図 9	壺形埴輪	-	-	(5.8)	段部 1/4	外面	器面磨滅 ヨコハケ(9~10本/cm)、 『滅	外 にぶい褐色 内 明褐色	白色粒子やや多 く含む。	
第 59 図 10	壺形埴輪	-	-	(3.7)	口縁部		ヨコハケ (9本/cm) ヨコハケ (7本/cm)	外 にぶい黄橙色 内 にぶい褐色	白色粒子少量含 む。	
第 59 図 11	壺形埴輪	-	-	(17.4)	口頸部	外面 粘土チ コハケ デ	頸部ナデ→粘土紐貼付後下半に 5填ユビオ サエ→口縁部ヨ - (10本/cm)→ヨコナ 頸部ナデ、口縁部ヨコハケ(8	橙色	白色粒子少量含む。	
수축 FO 5년 10	丰心体於			(0, 0)	連呑 女け	本/cr	1)	松石	ウム料フ込いタ	
第 59 図 12	塑形坦粣	-	-	(8.8)	頸部	ナデ	ナナメハケ $(5 \sim 6 $	位巴	自色粒子やや多く含む。	
第 59 図 13	壺形埴輪	-	-	-	頸部	外面 内面	ナデ ナナメハケ (9 本 / cm) →ナデ	明褐色	白色粒子少量、 黒色粒子少量含 む。	
第 59 図 14	壺形埴輪	-	(12.6)	(5.9)	底部 1/4		ナナメハケ (8~9本/cm) ナナメハケ (6本/cm)	橙色	白色粒子やや多 く含む。	
第 59 図 15	壺形埴輪	-	(12.5)	(8.5)	底部 1/4	外面 内面	ナナメハケ (9 本 / cm) ヨコハケ (7 本 / cm)	橙色	白色粒子少量含 む。	
第60図16	壺	-	6.4	(8.0)	底部〜胴部 (同一個体 の頸部あ り)	外面内面	ナナメハケ (10 本 / cm) ・器面 磨滅 浅いハケ目 (10 本 / cm) が残る ヘラナデ	橙色	白色粒子やや多 く、黒色粒子少 量含む。	底部焼成前穿孔(ヘラによりヨコ方向に 止めながら 切っている。)
第60図17	壺	-	-	-	頸部 1/2	外面 内面	タテハケ (11 本 / cm) ナデ	明褐色	白色粒子、黒色 粒子少量含む。	
第 60 図 18	壺	-	6.5	(6.3)	底部~胴部	外面磨滅内面	ナナメハケ (10 本 / cm)・器面 浅いハケ目 (9 本 / cm) が残るへ ラナデ	橙色	白色粒子・黒色粒子少量含む。	底部焼成前穿孔(ヘラによりヨコ方向に 止めながら 切っている。)
第 60 図 19	壺	-	-	(3.3)	頸部 1/2	外面 内面	ヨコナデ ヨコハケ (12 本 / cm)	橙色	白色粒子少量含 む。	7,7 41 60 7
第 60 図 20	壺	-	-	(3.0)	頸部 1/2	外面内面	ナデ 口縁部に浅いハケ (15 本/cm) 状ナデ、胴部上半ヨコハケ (8 本/cm)	橙色	白色粒子少量含 む。	
第60図21	壺	-	(3.3)	(1.8)	底部 1/2	外面 内面	器面磨滅 ナデ	にぶい褐色	白色粒子・黒色 粒子少量含む。	底部焼成前穿 孔
第60図22	高坏	-	-	(3.5)	坏部	外面 内面	ナナメハケ (10 本 / cm) ナデ	にぶい黄橙色	黒色粒子やや多 く含む。	内外面赤彩
第60図23	高坏	-	-	-	坏部		ナナメハケ (10 本 / cm)、器面 磨滅	にぶい黄橙色	黒色粒子少量含む。	内外面赤彩
第60図24	器台	-	-	(2.0)	坏部	外面 内面	タテハケ (10 本 / cm) ナデ (一部ハケ痕跡あり)	橙色	白色粒子少量含 む。	坏部底部焼成 前穿孔
第 60 図 25	高坏		(10.7)	(8.3)	脚部	外面内面	脚裾部ナナメハケ (10本/cm)、脚柱部タテヘラミガキ脚柱部下部ヨコハケ (12本/cm)、脚裾部ヨコナデ	にぶい黄橙色	黒色粒子少量含む。	外面赤彩
第 60 図 26	高坏	-	(13.8)	(1.9)	裾部 1/4	外面 内面	ナナメハケ (8本/cm) →ヨコナ デ ヨコハケ (8本/cm)	明褐色	黒色粒子少量含 む。	
第 60 図 27	器台	-	-	(8.2)	口縁部、裾部欠	外面	脚部ナナメハケ (10 本/cm)、 坏部ナデ (一部ハケ痕跡あり) 坏部ナデ、脚部内面タテユビナ デ、裾部ハケ (15 本/cm)	橙色	白色粒子やや多 く、黒色粒子少 量含む。	
第 60 図 28	器台	-	-	(5.7)	脚部	外面 内面	ナナメハケ (10 本 / cm) 脚部内面タテユビナデ、裾部浅 いハケ状のナデ	橙色	白色粒子少量、 黒色粒子やや多 く含む。	
第 60 図 29	高坏?	-	-	(2.8)	脚部破片	外面 内面	ナナメハケ (10 本 / cm) ナデ	明褐色	白色粒子・黒色 粒子少量含む。	
第 60 図 30	器台	-	-	(9.4)	口縁部、裾 部欠	外面内面	ナナメハケ (11 本 / cm)、器面 磨滅 脚部内面上部ユビナデ、脚裾部	明褐色	自色粒子、黒色 粒子少量含む。	

第60図31 円筒埴輪 -	子少量含
第 60 図 32 円筒埴輪 胴部 外面 ナナメハケ (6 本 / cm) 橙色 白色粒 うむ。	Z/小昌今
内面 ヨコハケ (4 本 / cm) む。 透孔 △二辺	6/小景今
第60図33円筒埴輪	1 夕重ロ
内面 ナナメハケ (8本/cm) む。 透孔 △二辺	子少量含
第60 図 34 円筒埴輪 胴部 外面 ナナメハケ (9 本 / cm) 、 突帯 外 黄橙色 白色粒子	
ヨコナデ 内面 ナナメハケ (8 本 / cm) 透孔 △ (?) 底辺一辺 内 明赤褐色 く含む。	
第 60 図 35 円筒埴輪 突帯 外面 ナナメハケ (9 本 / cm) →突帯 外 橙色 内 褐色 お。	子少量含
内面 ナナメハケ (7 本 / cm) 透孔 △ (?) 底辺一辺	
第60図36 円筒埴輪 - - - 底部 外面 タテハケ (9 本 / cm) 橙色 白色粒子 (含む。	
第 61 図 37 円筒埴輪 胴部 外面 ナナメハケ (8 本 / cm) 橙色 白色粒ラ 内面 ナデ 透孔 △二辺 む。	子少量、
第 61 図 38 円筒埴輪 突帯破片 外面 ナナメハケ (8 本 / cm) 橙色 白色粒ラ 白色粒ラ 白色 白色 白色 白色 白色 白色 白色 白	子少量含
第61 図 39 円筒埴輪 - - 破片 外面 ナナメハケ (9本/cm) 橙色 白色粒子	子わずか
	2粒子少
第 61 図 40 円筒埴輪	
内面 ヨコハケ (10 本 / cm) 、接合部 ナデ	
第 61 図 41 円筒埴輪 突帯 外面 器面磨滅 明赤褐色 白色粒ラ わ面 ナナメハケ (10 本 /cm) お。	子少量含
第 61 図 42 埴輪 □緑部 外面 ナナメハケ (10 本 / cm) →ヨ 橙色 白色粒ラ コナデ む。	子少量含
第61 図 43 埴輪 口縁部 外面 ヨコハケ (9 本 / cm) 、ヨコナ 明褐色 白色粒子 だ合む。	
内面 ナナメハケ (9本/cm) →ヨコ ナデ	
第61 図 44 埴輪 □緑部破片 外面 ナナメハケ (9 本 / cm) 外 橙色 白色粒 ラ 内面 ヨコハケ (9 本 / cm) 内 明褐色 黒色粒 ラ	アやや多
コナデ に、無色 内面 ナナメハケ (11 本 / cm) →ヨ 量含む。	
第61図46 埴輪 - - - - 口縁部 外面 ナナメハケ (10本/cm) 外 にぶい褐色 白色粒子 内 明褐色 内面 ヨコハケ (9本/cm) 内 明褐色 粒子やそむ。	子、黒色
第 6 1 図 47 埴輪 口縁部 外面 ナナメハケ(10 本 / cm) 橙色 白色粒子 に、黒色 量含む。	
第 61 図 48 壺形埴輪 口縁部 外面 ナナメハケ (12 本/cm) にぶい褐色 白色粒子	0粒子少
第 61 図 49 埴輪 胴部破片 外面	
内面 透孔 異形 (巴形?) の透孔二辺	

図版No.	種別	口径 (cm)		高さ (cm)	残存	整その他の特徴 色調 胎土	備考
第8図 第1号墳表 採遺物	円筒埴輪	-	(49.4)		胴部破片、 底部破片	面 タテハケ (5 本 / cm) 、突帯剥 にぶい褐色 自色粒子少け 離面にナナメハケ (6 本 / cm) に含む。 に含む。	

第14表 古墳時代以外出土遺物(土器・陶磁器)観察表

図版No.	トレンチ	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	残存	胎土	釉薬	備考
第23図1	4tr	かわらけ	2.4	(9.5)	(6.6)	1/5 破片	橙色		15c 後半頃
第 34 図 5	6tr	灰釉皿	-	-	(6.0)	底部 1/8	にぶい黄橙色		底面にトチン残 存。16c 前半頃
第 39 図 9	8tr	折縁皿	-	(12.8)	-	1/7 破片	浅黄色	明黄褐色〜オ リーブ灰色	16c 頃
第 45 図 1	10tr	染付小碗	-	(8.6)	-	口縁部 1/6	白色		瀬戸美濃。染色体 文。19c 後半頃